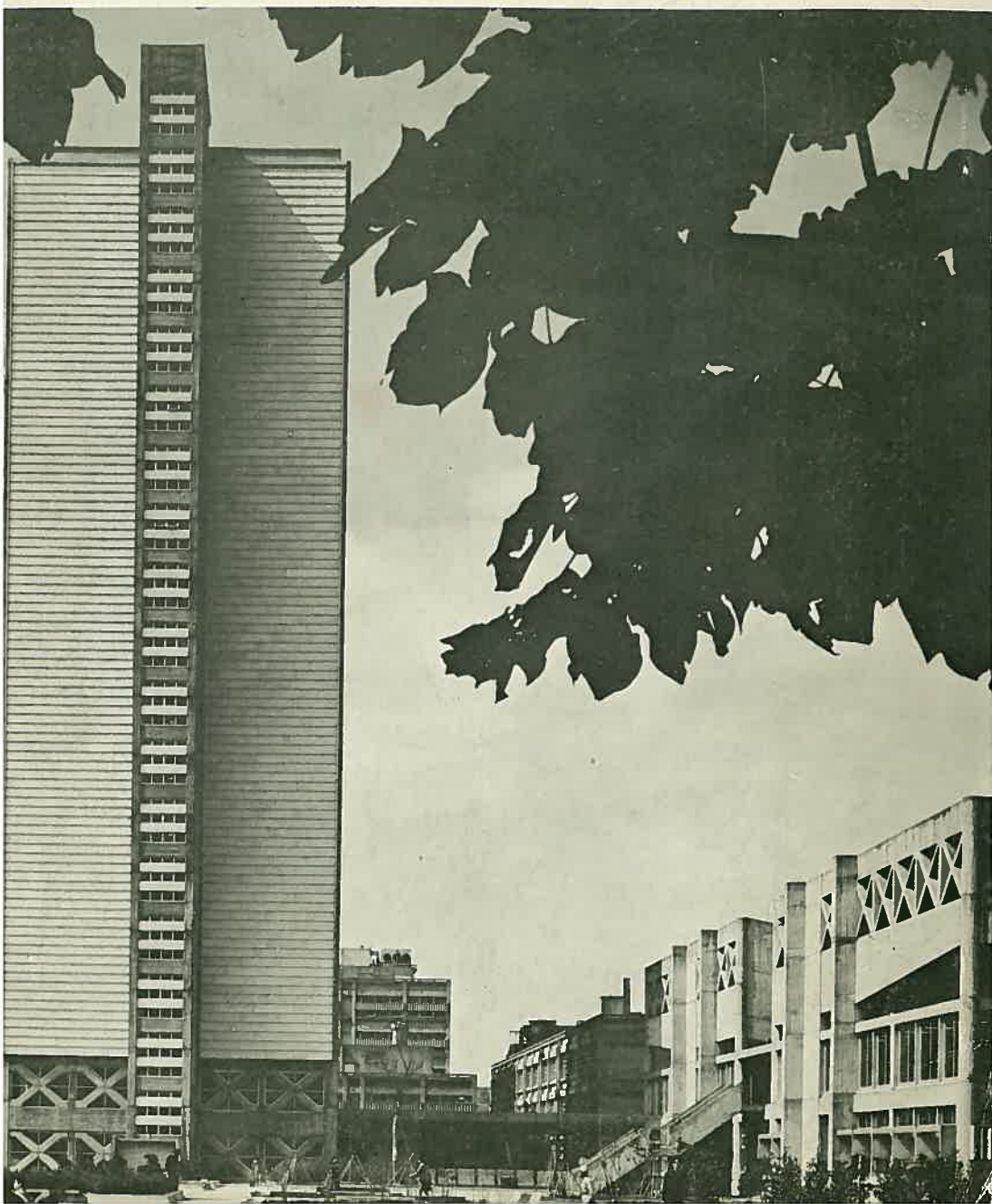


早稲田大学

応用化学半世紀の回顧



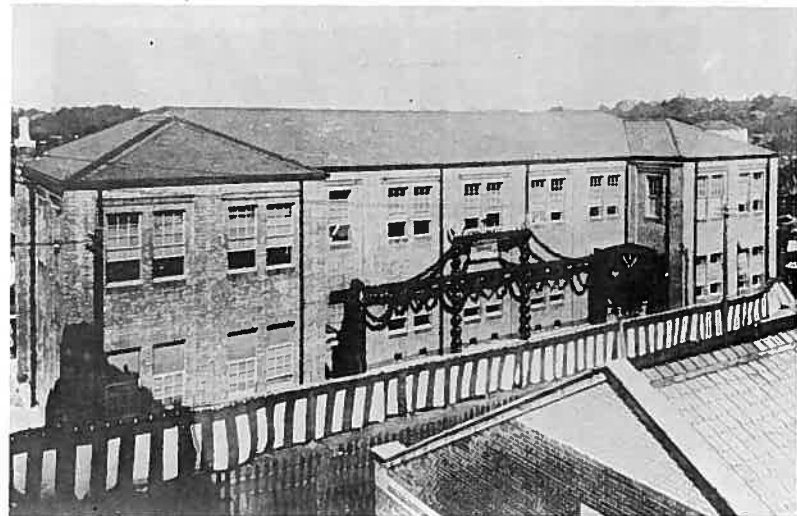


小林久平 先生



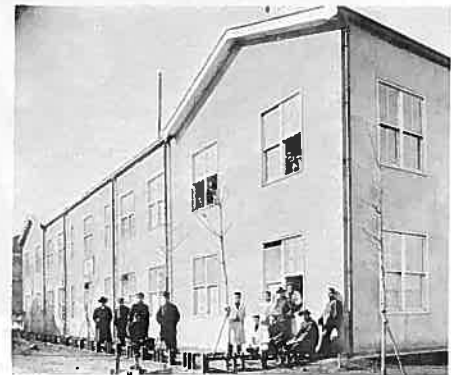
現理工学部

赤レンガの豊明館竣工式 ——大正7年10月——



旧応用化学科9号館（現6号館国際部）

——昭和11年～昭和42年——



仮応用化学科実験室

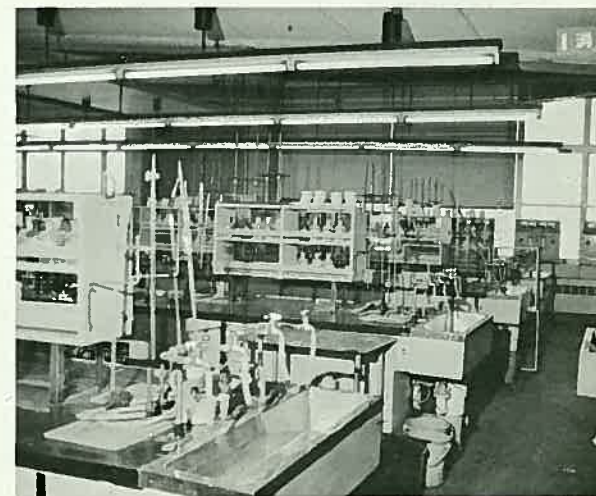
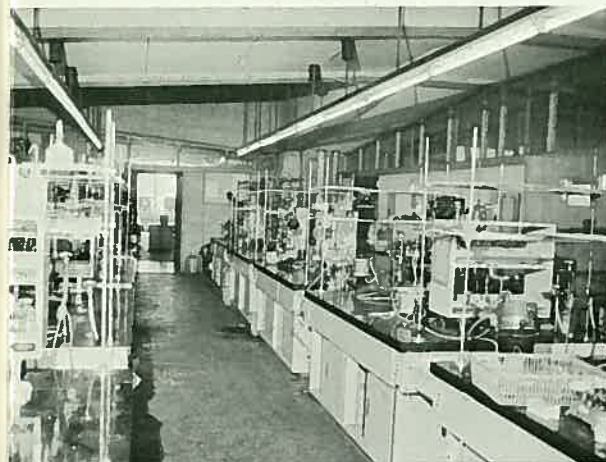
——大正13年～昭和11年——

化学工学コース別実験室（60号館）

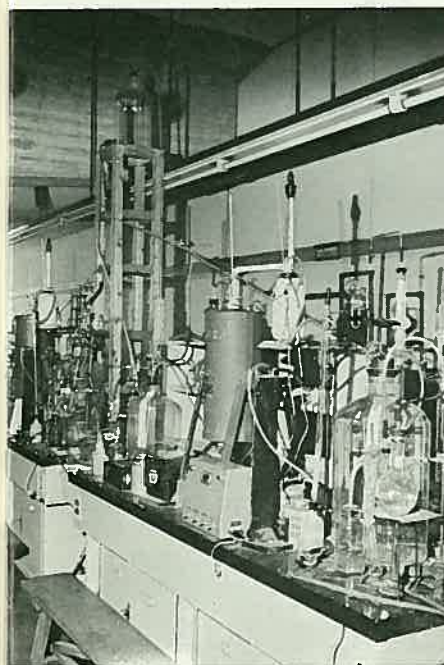


工業化学コース別実験室（56号館）

——廊下の向う側は化学分析共通実験室——



化学分析共通実験室（56号館）



物理化学共通実験室（56号館）

発刊によせて

早稲田応用化学会は昭和四十七年、設立五十周年をむかえ、その記念事業の一つとして本書の発刊が企画されました。

顧みますに、大正六年早稲田の森の一隅に応用化学科が創設され、数年を経てから教員、卒業生、学生の親睦と教室の後援を目的として、本会が設立されたのであります。現在、三千名を超える会員を擁するようになりましたが、その間幾多の曲折を克服して今日に至ったゆえんのものは、設立以来脈々と受け継がれた早稲田精神と諸先輩のご努力、ならびに各方面からのご支援の賜であることを強く銘記しなければなりません。

ひるがえって、わが国の化学工業界の現状をみると、ある面では戦後最大の転機に立っていると考えられます。戦後のめざましい技術開発に支えられ、その生産力において世界第二位の地位を達成しましたが、その生産第一主義ならびに輸出振興という至上命題も、最近では福祉優先、国際協調という歴史的流れの前に方向転換を余儀なくされています。

こうした時期に、応用化学科および応用化学会の半世紀の途をふり返り、これからの覚悟を新たにすることに本書の意義があることと思う次第です。

日頃の会員諸氏の本会へのご協力を深謝致すとともに、教室および当会の益々発展することを祈念致す次第です。終りに、繁忙な教務のかたわら編集の実務の任にあたられた教室の方々、および本書出版のために種々の面でご協力ご支援を賜わった各位に深甚な敬意と謝意を表する次第であります。

昭和四十九年二月

早稲田応用化学会

会長 棚 橋 幹 一

理工科の開設と応用化学科の誕生

早稲田大学総長 村 井 資 長

私は永い間応用化学科に在職、その末席を汚しながら、最近二十年間を本部あるいは理工学部
の役職にあつて、大切な教室での研究の面でなんらの貢献もできなかったことを、申し訳なく思
っている次第である。今回応用化学科の半世紀の回顧録の企画にあたり、早稲田大学の歴史のな
かで理工科開設の経緯と応用化学科誕生の一端を記して参考に資したいと思う。

早稲田大学は明治十五年（一八八二年）その前身東京専門学校の名のもとに東京府豊島郡戸塚
村で呱呱の声をあげた。今年は九十二周年にあたる。理工科の開設は大学の第二期発展計画であ
る創立二十五周年記念事業の一環としてとりあげられたものである。実はこのときの計画の一つ
として医学部の開設もあったが、その事業計画遂行のための募金目標百五十万円（理工科新設費
三十万、医科新設費八万、病院建設費十七万、土地購入費十五万、大講堂建設費二十万、固定基
金六十万）に対して九十二万円余にとどまったため、医科までの計画は中止せざるを得なかった

わけである。

当時として、私学で理工系学科をもつということは、経営的に容易なことではなかったのであるが、大隈重信は日本近代化のなかでその工業立国、殖産興業の立場を見通して、あえて理工科を優先したのである。ために、今日まで医学部の夢が実現できないままにあるわけで、総合大学として医学部を欠いていることは誠に残念なことである。そしてその理由の一つとして理工科経営のためとあつては、私は永く理工学部を籍をおく一員として申し訳なく感ずるというばかりでなく、総長の立場において、なんとかしてその開設の夢を実現するための努力をしなければならぬと考え、腐心している次第である。

ところで、早稲田大学に理工科が開設されたのは、創立二十五周年の記念事業とされていることは前述の通りであるが、これは東京専門学校設立時の理化学科の再興といえることができるのである。それは東京専門学校は政治科、法律科、理化学科の三科で出発したのである。そのときの理化学科には物理、化学、生物、天文学、土木、地質学などの学課程が配されていたのである。しかしながら当時志願者が極めて少なく、経営上の困難から二年後に止むなく募集を停止、閉鎖されてしまったのである。

明治十五年の東京専門学校に理化学科をおいたということは、なんといっても大隈重信の炯眼といわなければならない。大隈は創立十五周年の祝典の演説で、自然科学の基礎としての物理学の重要性を説き、理化学科を閉鎖したことは千歳の遺憾であると述べている。そして明治四十年の創立二十五周年式典では次のような記念事業の計画を発表したのである。「吾人が吾が大学の第二期発展計画として切に実行せんと欲するものは、理工科、医科の新設これなり。……吾が大学におく理工科は専ら応用的諸学科即ち機械、電気、鉱業、土木、建築、製造化学の諸学科これなり、時勢の必要上、経営の順序として機械、鉱業の二科をおく。……」かくして製造化学科は若干後回しになったが、大正六年応用化学科として開設されたのは、欧州大戦だけの近視的な理由によつたものでないことは、以上の事実から明らかである。

応用化学科の開設の経緯については、本文に詳述されているのでここでは省略するが、ここに奇しきエピソードを記したいと思う。大隈重信は青年時代長崎で英語学校を開いていたのであるが、この時の生徒に高峰譲吉がいたのである。高峰は人も知る「タカジアスターゼ」の発明者で東京大学の応用化学を明治十二年に第一回生として卒業しているが、その後輩にあたる高松豊吉博士はわが応用化学科の育ての親小林久平先生の恩師でもあり、応用化学の開設にあたっては大

隈重信のよき助言者でもあった由である。

早稲田大学は八年後に百周年を迎える。わが応用化学科も、開設以来五十七年の歳月をつみ重ねて今日に至ったわけであるが、共にその名が保たれているだけでは、その生命が保たれているとはいえない。その理念と使命が確実に生かされていなければ、なきに等しいのである。歴史はただそれを振り返って過去を確かめ、あるいはその夢を追うだけでは何の意味もたない。この回顧録から理工科とくに応用化学科の誕生のいきさつを十分ご理解いただき、未来への基盤となし、建学の精神と創学の理想を振起されることを願ってやまない次第である。

目次

口 絵

発刊によせて

早稲田応用化学会会長 棚橋 幹 一

i

理工科の開設と応用化学科の誕生

早稲田大学総長 村井 資 長

iii

一 早稲田の森の一角に

1 日本が必要とした応用化学

3

2 教授、校舎（早稲田キャンパス時代）

6

3 学生生活（戦前・戦中）

12

4 小林教授の二十余年

16

二 高まる応用化学の重要性

- 1 教室、卒業生、学生を結ぶ早稲田応用化学会
- 2 今に生きる伝統、燃料化学科の九年
- 3 戦時下秘録

三 化学工業は不死鳥

- 1 軌道にのる復興
- 2 多様化の時代へ
- 3 新制大学から大学院大学へ

年譜・資料

編集にあたりて

編集委員長 大坪義雄

20 27 33 36 40 48 61

早稲田大学 応用化学半世紀の回顧

早稲田大学 応用化学部半世紀の回顧

一 早稲田の森の一角に

1 日本が必要とした応用化学

日本の近代産業が確立期にはいった大正五年（一九一六年）四月、早稲田大学理工科高等予科に応用化学科誕生、入学志願者は定員の数倍に達した。そして翌六年九月には本科三年の授業が始まった。応用化学科創立はこの本科発足のときとされ、昭和四十二年（一九六七年）十一月、創設五十周年記念式典と同記念パーティを東京目白・椿山荘で開き、卒業生百六十名が集まった。

早稲田大学に理工科が設置されたのは、明治四十一年（一九〇八年）なので、応用化学科の開設は九年遅れ、機械、電気、採鉱、建築の各科に続く五番目の伝統ある

学科である。

このころ、応用化学科を設けていたのは東京では東京帝国大学と蔵前高工（現東京工業大学）だけだった。

学長天野為之氏は早稲田学報大正六年二月号に応用化学科について「早稲田大学が化学研究の必要を認め、その研究機関を設ける計画をたてたのはかなり古いことだが、種々の事情のためこれを実現することができなかった。ところが時勢の進展は設置延期を許さなくなった」と述べている。

また、応用化学科開設実務の中心となった大学理事田中唯一郎氏は、これより先、大正五年四月の早稲田学報で開設当時の事情を詳しく次のように解説している。

「応用化学科は最近思いついたものではない。文部省の認可も得ていたが、多額の経費があるので見合わせていた。しかし、第一次世界大戦の影響から化学研究が叫ばれるようになり、既設の電気学、冶金学でも化学の教育が必要になったので、有力者の援助を受けて開設する

ことになった」

大隈侯の相談相手に東大教授高松豊吉博士がいた。のちに東大名譽教授となり、東京瓦斯の名譽社長、東京工試の初代所長などをした人である。もともと大隈侯は、高峰譲吉氏や桜井譲二氏（東大教授）を招いて化学や化学工業についての講演を開くなど、化学についての関心は深かったが、高松博士の「応用化学は国家にとって必要なものである」とのすすめに、応用化学科開設に踏み切ったという。

教育期間は東京大学の六年、藏前高工の三年に対し早稲田は四年半。理論的指導者の教育を目標にした東大に対し、実際に役立つ人物の育成を目ざした。教授陣は河合勇、富井六造両氏だけが教授で、ほかは全部外来講師だったが、実業人を多く迎えていた。理工科と名付けたことにも、工科を目ざした理科をやるのだとの早稲田の学風がうかがえる。この実際に役立つ学問を尊んだ気風は、新制大学の発足まで続いた。

た。

その後、大正天皇の即位大典記念事業の一部として大正七年に増築が完成、昭和二十年の戦災で焼失するまで理工科だけでなく、政法文商師範各科の研究室などに広く使われた。学園の中心位置にあり、戦前の卒業生には懐かしい建物で、その跡には現在文科系大学院が建っている。

山沢松男氏（大

正九年卒業）は、

「高等予科に入った

ときの応用化学志望

者は八十六人だった

が、本科へ入れたの

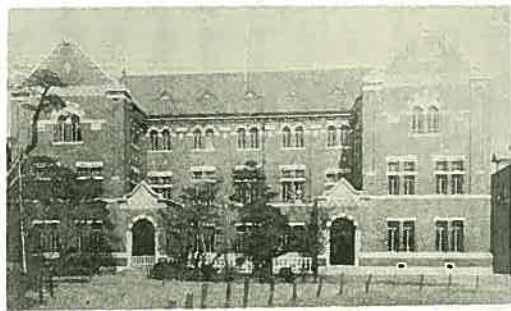
は二十人だった。大

正六年九月から本科

の講義が始まったが

教室が完成する大正

七年十月までは、採



恩賜館

応用化学科の創設後間もない大正九年、早稲田大学は

学制改革により、専門学校令による大学から新大学令による大学に昇格した。就学年限も延長されたので、在校生の多くは新制度で卒業した。このため大正十二年三月

には二、三回生が同時に卒業、一回生が卒業した大正九年七月との間に一年八カ月の差がある。専門学校令時代の卒業生は、早稲田工学士を称していた。

応用化学科創設当時の日本は世界大戦の好況にわき、なかでも化学、鉄工、機械各工業がさかんになっていた。好況は多くの成金を生み出し、このころの有閑富有階級の生活を表わすことばとして「きょうは帝劇、あすは三越」というキャッチフレーズがある。

応用化学科を含む理工科創設計画に対し、明治天皇は金三万円のご下賜金を下された。大学はこれを記念して明治四十五年学園内に恩賜記念館を建設した。建物は英国風ゴシック式煉瓦造り三階建て三百十余坪、理工科実験室を中心に各科研究室をあわせた簡素純朴な建物だった。

鉱科の教室と実

験室を借りてい

た。親類の家に

同居しているよ

うなもので、肩

身の狭い生活で

した」

と、当時を回想している。

応用化学科の実験室は、当時の財界の長老森村市左衛門翁の主宰する森村豊明会の寄付により、現在の演劇博物館の左に赤煉瓦で延べ三百三坪の規模で作られた。

早稲田大学創立三十五周年式典は大正七年十月に、応用化学実験室の開館式も兼ねて行なわれたが、席上大隈総長は「ここに忘れるべからざる人はこの大学に応用化学の実験室をこしらえて下さった森村男爵である。役人から寄付を申し込まれても、すぐはねつけてしまうが、この学校やその他の教育慈善団体から申し込まれると相



森村男爵

当な金を出す。こういう人がふえると実業社会も品が良くなる」と、謝辞を述べている。

応用化学科実験室は豊明館と名付けられ、応用化学科の教員室、教室も設けられた。この建物はその後の震災で焼けたが、「ブラック時代」「九号館時代」を経て現在に至る応用化学科の歴史はこれのようにして始まった。

2 教授、校舎（早稲田キャンパス時代）

創立当時は河合勇、富井六造両氏だけが教授で、ほかは全部外来講師だった。大正七年十一月、河合氏は辞任、河合氏と東大で同級だった小林久平氏が学科主任になった。小林氏はその後、昭和十二年まで主任をつとめ大きな足跡を残した。

大正九年七月には武富昇、山口栄一両氏が助教授に任ぜられた。富井教授は同年六月にドイツへ出発、大正十三年十二月まで留学した。

人造肥料会社庄司務（肥料）などの諸氏も加わった。

小栗講師は昭和二年教授に任ぜられた。同三年八月松井教授は辞任、講師になった。武富助教授は昭和五年六月に教授昇格、宇野昌平、秋山桂一両氏は昭和四年卒業とともに助教授になり、その後、石川平七、村井資長両助教授が加わるなど陣容はいっそう強化された。

当時の若い先生の中には、学校では詰めえりの服を着ている方もおられ、その気取らなさに昭和二年入学の神原周氏（昭和五年卒業）は、「これが偉い大学の先生か」と驚いたそうだ。

照井絵治氏（昭和六年卒業）の思い出では怖い先生の代表は松井元太郎氏。おかしなことや、間違った方法で実験していると、誰でも怒鳴りつけるので、先生の姿がみえると、カミナリがいつ落ちるかと思ひ張ったものがある。東京工業大学へ移られてからも、応用化学科の酸アルカリの講義はずっと続けられたが、早口で文献をあげながらドンドン先へ進んでしまうので、講義二時間分

大正十年四月

には、松井元太郎氏を教授に迎え、同十一年には山内真三雄氏、同十二年四月には山本研一氏が助教授に、また五月には小栗捨藏氏を講師に迎えるなど、



左から
小林久平、武富昇、松井元太郎、富井六造の諸先生

応用化学科のメンバーも次第に充実した。大正十三年十月当時、これらの専任教員に加え、東大から西松唯一（火薬学）、永井彰一郎（芳香油）、牧鋭夫（染料）、亀山直人（電気化学）などの諸氏が来られ、さらに鉄道省大臣官房研究所長屋修吉（実業）、東京高等工芸学校鎌田弥寿治（写真）、水産講習所松尾靈彦（皮革）、大日本

のノート整理に四時間もかかる始末。

松井先生については、大友恒夫氏（昭和十四年卒業）も「講義の時間になると先生が教室の出入口にカギをかけてしまうので、遅刻した学生は入れない。行き所のない学生が喫茶店にたむろしていた際、たまたま警察の不良学生狩りにあったこともある」と、先生やその当時は懐しんでいる。

小栗捨藏先生はカミナリは落とさないが、諄々と説教されるヒゲの親父だった。

後に三菱化成に移られた東工試の藤木経明氏は、染料の講義に亀の子の式を黒板一ぱいに流れるように書いて学生を驚かし、高砂香料の堀内利器氏は、極めて文学的な講義だった。旭ガラスの重役、三角愛三氏の名講義も学生の記憶に残っている。この三角氏には工場見学の後、横浜のオリエンタルホテルで晩餐の御馳走になるなど、講師陣も多士済々であった。

創立当時の教師、建物について故小栗捨藏教授は会報



震災前の早稲田大学通用門（現在の正門）

につぎのように報告されている。

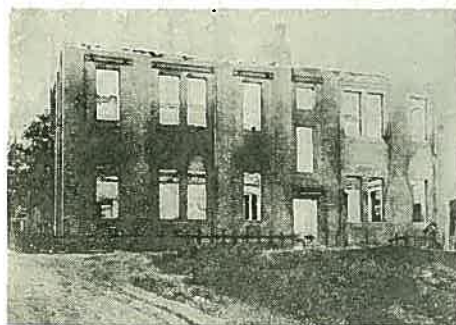
「私が講師になったのは大正十二年春のことだった。

当時の応用化学の教室は小林、松井、富井の三教授、武富、山口、山本、山内の四助教授と若干名の講師だ。

この建物は、大正十二年の関東大震災にあい、薬品室から発火して一時間そこで焼け落ちた。当時の学科主任小林久平氏は、理工学部長山本忠興氏に次のような報告書を提出している。

「大正十二年九月一日、私は助教授山本研一氏と実験後、昼食中だった。地震で発火したのを見て消火しようとしたが、しばらくは水がなく、消防隊到着後、隣接の理工科木造大建物への延焼は食い止めた。

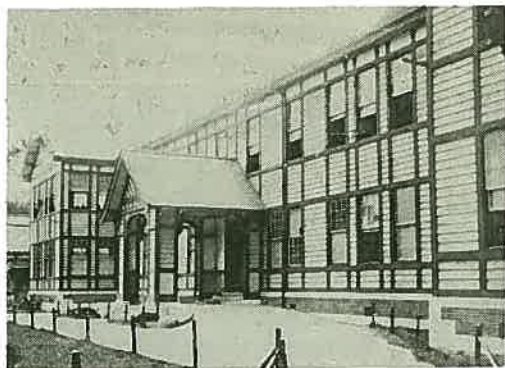
しかし、重要書類、試験器具は大部分を取り出せなかった。なかでも富井教授がドイツから送った本二コウリ、私を取り寄



震災で焼けた応用化学科

せた供試フロリダアース、テレー産原油の焼失は残念だった」

関東大震災によりその他の施設では、学園最古の記念すべき建物、大講堂が崩壊、文科教室が傾斜、大学外回りのレンガ、鉄サクのへいが全壊するなど学園は大きな損害を受けた。



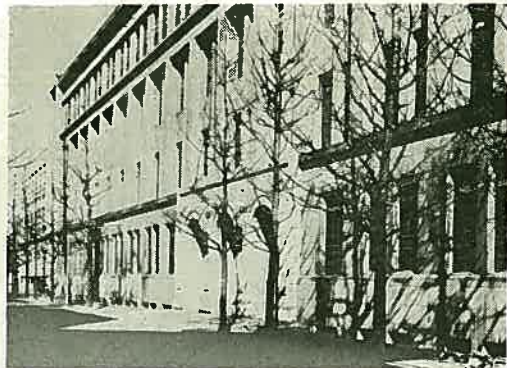
第一高等学院（大正14年頃）

関東大震災による実験室の焼失後は、採鉱冶金学科の木造実験室や第一高等学院の実験室を借りるなど非常に不便したが、やがて大正十三年、旧実験室の南側に鉄骨コン

クリートの仮実験室が完成した。五年後には本建築をすることにしていたが、昭和十一年まで仮り教室住まいが続いた。

この仮教室は鉄骨二階建て延べ二百二十六坪、一階に二実験室と四研究室、二階に四実験室と三研究室があった。初めは講義室もあったが、学生数がふえるにつれ、実験室に変更、講義は商学部の一教室を借りて、また物理実験、製図は理工学部所属の各室で行なわれた。田上信氏（昭和八年卒業）は、

「仮実験室は窓が低く外から室内がよく見えた。設備、装置等の不備で、先生方が苦心しているのがよくわかった。たとえば恒温槽のごときは大ばけつ、または酒だるの回りを毛布で巻き、熱源にカーボン電球の頭部を水中に浸し、電気抵抗器は木わくに細く切ったトタン板を張り渡して、しかも測定値は十分正確になるよう苦心していた」と語っている。ちなみに、その電気抵抗器を電気科でワセダレオスタットと命名していたそうである。



応用化学科9号館（現在6号館国際部）

一挙に四十名台になったため、収容能力ギリギリ一ぱいで、教室はまさにパンク寸前だった。そうしたことも、新築をうながしたのだろう。昭和十年九月、いよいよ応用化学教室の本建築が始まった。鉄筋コンクリート造り地上四階地下一階延べ千十七坪の規模である。地下にマイナス20℃の大型の低温恒温槽、

屋上に臭ガス室、X線室、分光器室、元素分析室等を置いたのは、当時としては最新の考え方であり、日本最高の設備であった。建築費の一部はやはり豊明会の寄付を受けた。

昭和十一年十一月一日には竣工披露の会を開いた。午前中は校賓、午後は化学工業に関係のある学者、実業家をお招きした。校舎の明るいこと、室内の整然として統一されていること、排気換気の手行きとどいていること、特殊研究室の多いことなどが特に好評だったようである。

夜は教室一同、来観の卒業生、学生が内幸町大阪ビルレインボー・グリルで祝賀懇談会を開いた。卒業生の出席が多数あり、総出席者数百五十五名、応用化学科の万



9号館開設披露 右から、高田早苗前総長、小林久平学科主任、田中穂積総長（杖を持っている人）

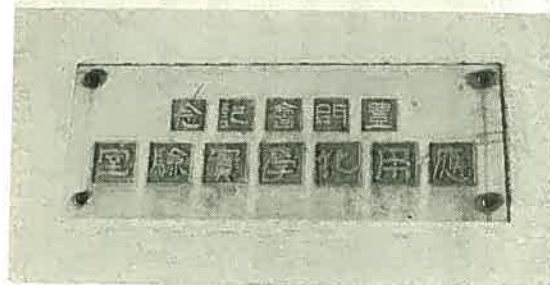


バラック時代の応用化学科、手前は薬品庫

この狭い粗末なバラックが、英国のシェークスピア館を模して作られたしょう酒な演劇博物館の真横にあつて、奇妙な対照をなしていた。いろんな人がそのオンボロぶりを記憶している。照井総治氏（昭和六年卒業）の記憶から――

がはりつけてあった。にわか雨でも降ると雨水が周囲から流れ込んでくるほどの床の低さであり、二階は実験台の重みで床が垂れ下がり、揺れる甲板を歩くようであった。天井は低くて壁はセメント漆喰、窓は少なく、そのガラスは曇ってしまつて青空などは見えない。文字通り夏暑冬寒そのものであった。近年ではどこにも見当たらないような建物だったが、三年間もお世話になると懐しい思い出の建物となり、郷愁を感じるのは小生だけであるまい――

旧制一四回生までは学生数二十名前後だったのに一五、一六回生は三十名前後、一七回生だけは



大理石の表札

歳を高唱して午後九時ころ散会した。

また十一月三日には校友会秋期大会が大隈会館庭園で開かれたのを機会に新築教室を公開したが、参観者数は午前中だけで百余名、午後になってもその足は止まず、累計三百人を数えるほどで教室の一同を面食らわせた。

中岡敏雄氏（昭和十二年卒業）は、

「今までのボロ家に比べると、さながら月とスッポンの相違だった。よくもまあ、これほどの荷物が、あの狭いバラックに納まっていたものと感心したが、ともかく立派な建物に移った気分は極めて満足だったし、自分たちの立場が高められた感じさえした。だが反面、それまでのバラックがあまりにも狭いがための、ひざつき合わせた親密感や一体感が薄らいでいくようなさみしい気持ちも確かにあった」と、成長の喜びと悲しみを述べている。

この建物は独得なアカデミックなふん囲気をかもし出し、新入生にはいよいよ大学へ来たという緊張感を抱かせた。長い間応用化学教室として愛されたが、昭和四十

二年理工学部移転に伴って内部は改造され、現在は国際部として外人学生が使用している。

3 学生生活（戦前・戦中）

第一次世界大戦と第二次世界大戦の間にはさまれた大正末期から昭和初期は激動と不安定の時代だった。日本の経済や産業は拡大、発展を続けたものの激しい起伏がみられ、左翼思想の洗礼を受けた学生の中には、実践運動に乗り出す者もいた。昭和五年ごろ行なわれた早稲田車庫のストは応化の学生が指導、検挙された学生を武富教授がもらい下げに歩いた。時代はさかのぼるが、労働運動で有名な高野実氏も、かつてはわが科に在学、退学処分を受けている。正常に卒業していれば、三、四回生あたりと思われる。

昭和十二年七月、日華事変が起こった。この前後、高田牧舎で文科系の教授が「これではまるで全体主義国家

への移行ではないか」と、忌憚らない時局批評をしていたのを春日井佐太郎氏（昭和十三年卒業）は見聞、「さすが自由の早稲田だ」と思ったとの印象を憶えている。

大正から昭和にかけて、デモクラシーはなやかなころの経済は世界的な動向を反映して慢性不況の状態が続けた。物価は大正九年から昭和六年まで下げ続けたが、こ

れは明治以来初めての長期的なものである。企業の倒産や吸収合併も相次いだ。会社が危機を脱するのにおおわらわのため、卒業しても就職先がないという惨状だった。

武富教授の記憶では、昭和四年から十年ごろが非常な就職難、応用化学科教授大坪義雄氏は昭和七年卒の第一



早稲田車庫（大正14年頃）



神楽坂下（大正14年頃）



早稲田鶴巻町通り（大正14年頃）

二回生だが「十六名の卒業生中、学校で紹介してくれたのはたったの一人。その他の連中は自分で仕事を探さなくてはならなかった」と語っている。

満州事変以後の財政支出の拡大をきっかけに景気は拡大に向かい、軍需産業を中心に、産業はにわかに活気をとりもどした。不況の底は世界的には昭和八年だが、わが国の回復は早く、これまで無配、赤字を続けてきた企業が拡張に乗り出した。旧制一八回春日井氏は「私は昭和七年学院理科へ入学、応化卒が十三年だが、一、二年先輩から就職事情が良くなりだしたようである」と追憶する。

工業界は活況時代にはいり、応用化学科を志望する学生数もふえた。このようなときに応用化学科の新校舎が完成したのである。戦争への傾斜と新校舎の完成が応用化学科を活気づけた。井上勇氏（昭和十五年卒業）は、「昭和十年代の前半は、早大応用化学科の一つの高揚期だった」と回想する。

会社に戻れたが、二〇期生では戻る場所もなく、苦闘し自立の道を築いている者が多い。一九期生はひさし会、二〇期生はたいら会を作っている。小林久平先生のお名前を分け合ったこの期の人たちが、イバラの道を歩みながらも、今大きな役割を果たしているのは、この高揚期の学生時代が大きな支えになっているといえよう。

昭和十年代の学生生活で忘れられないのは軍事教練である。教練そのものは早くから行なわれていたが、戦時体制の強化にともない昭和十一年ごろから、軍事教練の強制がきびしくなった。阿倍通夫氏（昭和十五年卒業）の記憶では、毎週午後二時から五時まで、大学近くの戸山町にある近衛連隊（現在の女子学習院、戸山高校）に出かけたり、また千葉県の習志野、富士の裾野でも演習した。田中甫氏（昭和二十一年卒業）は、富士山麓や習志野、軽井沢で演習した記憶があるという。新入生に改まった敬礼をされて面喰らった先生もおられた。

一、二回生のころから野球はさかんだった。午後にな

小林教授のもとに築かれてきた応化の教室が形を整え、中堅の富井、小栗、武富、山口諸先生の下で山本、宇野、秋山諸先生が少壮研究者として、さかんに学会活動を行ない、服部報公会、学士院などから多くの研究費を得ていた。レインボー・グリルに集まるOB、教授、学生の応用化学会メンバーは生気に満ち、原達一、神原周、平野静夫氏ら第一線で活躍する先輩の覇気に溢れた議論は、学生たちを強く鼓舞した。

一方、社会は一步一步戦争の方向へ進み、旧制一八回の就職先は時局を反映して、軽金属、石油関係が比較的多かった。そして、次の一九期の卒業の年、昭和十四年からは就職の切符制が実施された。学生は割り当てを受けた企業にしか就職を許されず、それが、卒業生の将来に微妙な影を落とした。

一九期生はほとんどが財閥系、官営系に割り当てられ、二〇期生は新興軍需会社、満州関係に多くはいった。

このため、戦後外地から帰った一九期生の多くは元の

と実験をさぼり、安部球場と応化実験室の間の空地でよく野球をやったという。

東大、蔵前、早稲田三校応用化学科の交歓野球が始まったのは昭和八年。それまではほとんど交渉はなかったが、同じ道を歩む者同士、何かいい機会を持ちたいと、学生たちが話し合った結果、学校側の援助を得て昭和八年十月、蔵前のグラウンドで初試合が行なわれ、それから毎春秋、二回の試合が行なわれるようになった。

堀米耕平氏（昭和十年卒業）は、由良泰夫、川田恒雄両氏（昭和九年卒業）と交歓野球を推進した一人だが、「この野球を通して東大、東工大の人たちと友人になって大変良かった」と懐しんでいる。

野球に因縁のあるエピソードでは、昭和八年十月の早慶戦で両校応援団が衝突、乱闘騒ぎになった。「水原選手のリング事件」の火付け役となったリングを投げたのが、東正夫氏（昭和十二年卒業）だったということである。

篠原功教授が入学したのは昭和十年四月。在学中に二・二六事件が起こり、続いて日華事変が勃発した。世情は騒然としていたが、まだ大正ムードも残る、今から考えるとのんびりした時代だったという。

六大学野球、早慶戦の全盛時代で、早慶戦前日は練習を見に来た人で戸塚グラウンドのスタンドは一ぱいになり、グラウンド横の坂は自転車で埋まった。慶応では宮武、水原、山下ら、早稲田では三原、伊丹、小川らの名選手が輩出していた。

中野の哲学堂へ野球、テニスなどに出かけた思い出話も、このころの卒業生の口端によくあがる。

女子学生は現在では珍しくないが、第一号は大正末期に二回生と一緒に、聴講生として入学した田村美代子さん。紅一点でおおいに関心を集めたものだった。六回生には浅居ちかさん（理学博士）がおられたが、最近では優秀な女子学生が毎年二、三名くらい在籍している。

4 小林教授の二十余年

応用化学科五十年の歴史の中で忘れることのできないのは大正七年から、昭和十二年の初めまで、足かけ二十年にかけて学科主任をつとめた小林久平教授である。

小林教授の主任就任後、間もなく早稲田大学は専門学校令による大学から新大学令による大学に昇格、在学年限も国立、公立と同じになった。また、在任期間中には、関東大震災による応用化学科実験室の焼失と仮実験室の建設、昭和十二年の本建築完成など研究、教育の区切りとなる重要課題があった。小林教授はこれらを、同僚、学生、卒業生などの協力を得ながら解決、その間、早稲田応用化学会を発足させるなど、早大応用化学科発展の基礎を築いたのである。

小林教授は明治三十三年東大応化を卒業、大学院に数年残ったが、その後幾つかの会社を経て早大応化の主任

に就任、主任辞任後を含め二十余年の長きにわたり、応用化学科の発展に尽くされた。

戦時中までの卒業生は、早稲田の応用化学科という、すぐ度の強い眼鏡をかけた小林久平先生の姿が目に見え、ぶようである。

ぶようである。

照井総治氏
(昭和六年卒業)は、

「謹厳な小林先生は目が不自由なのによく書き物をされ、講義も親切で、工場体験からにじみ出たようなエッセンスをトットと話された。



小林先生還暦祝賀会（上野精養軒、昭和10年5月11日）

先生のノートをのぞいたら大きな字が二〇字くらいで一ぱいになっているのに驚いた。それに顔を埋めるようにして講義を続けられる姿は痛ましくもあるが、その執念にただ敬意を捧げるだけであった」と回想している。

研究は四十年間にわたって酸性白土と石油、泥炭に終始、何でも酸性白土と関係をつけた——とその熱心さが今も語りぐさになっている。

小林教授の功績を賛える退職記念の催しが昭和十七年二月十五日、帝国ホテル大宴会場で開かれた。小林教授の後任の応化主任小栗教授の発意、山本研一教授の司会で百五十九人が集まり、会は午前十一時から午後二時過ぎまで続いた。九州帝大名誉教授西川虎吉氏、京都帝大教授喜多源逸氏、東京帝大教授亀山直人氏、早大教授内藤多仲氏、早大応化助教授秋山桂一氏、東京工大助教授神原周氏らが祝辞をのべ、小林先生のお人柄を紹介している。

この日、シンガポール陥落の大ニュースが発表され、参会者の気分を一段と高めるなど気持のいい記念会であ

った。

山本名誉教授は、月刊雑誌「化学」の「日本の化学を築いた人々」のなかで、小林先生が若い人々には、もう「伝説」の人となっている——と、教授を次のように紹介している。

「小林先生の人となりを一言で言えば、先生こそいわゆる根性の人であったと思う。先生は四十代の中ごろから学問、研究を再開されて、多くの学術論文や著作を発表された。先生はお子様にも恵まれず、趣味、娯楽というほどのものもなく、その生涯を研究と教育と学会活動にその情熱をかけられた。先生の研究は郷土、越後の関係で資源に乏しいわが国に天産する酸性白土と石油に、戦時中は草炭（泥炭）の基礎と応用の研究に、またその工業化にまで打ち込まれた。そして研究成果の発表に止まらず、同学者の文献も丹念に紹介した『酸性白土』『石油およびその工業』『人造石油』『草炭』などを出版された。晩年に至って失明に近い視力で、なおそう、

に鞭うたれて、つぎつぎに改版、校正に励まれた先生の姿には、今なお心打たれるものがある」

その研究は現在の眼で見れば初歩的なものであったかも知れない。しかし、その当時のわが国の応用化学の分野では、他の大学に比べて、決してひけをとるものではなかった。

講義のないときでも午前八時十五分には学校に現われた。大坪教授が学生当時実験室にいてみると、誰かしきりに雑巾がけをしている。見ると小林先生で、実験室が汚いという。大坪教授が急いで手伝おうとすると、小林先生は雑巾バケツで背広のそでをぬらしながらも、「自分でやるから手を出すな」と手を休めない。思ったつと止まらない——そういう激しい気性の方だった。

厳しい反面、沢山の学生の一人一人をよく憶えて指導され、教育者としても立派な方であった。

昭和二十九年二月七日、小林名誉教授は逝去された。

ご遺族は香典四十万円を教室へ寄付されたので、その後

の校友の寄付も集めて小林記念基金を作り、教室の研究費の補助として、現在も大きな役割りを果たしている。

二 高まる応化の重要性

1 教室、卒業生、学生を結ぶ早稲田 応用化学会

私学は国立と違い、国家の庇護を受けず、いやでも自立していかなければならないため、学校側と在学生、卒業生の三者は自衛上、いわゆる運命共同体として協力せざるを得ない宿命にある。在学期間はわずかに数年に過ぎないが、わが応用化学科では早稲田応用化学会が校友、教室、在学生の三者を結び、学術雑誌としての早稲田応用化学会報を発行して来た。

スタートは大正十一年ごろに学生が発起して学科内輪の発会式を行なったが、大正十二年五月、他学科からも諸先生方をお招きし、正式の創立総会を恩賜記念館教室

数名に付き添って北陸、関西および九州の化学工業会社を見学せんがためなり。……とある。旅行記は四月二日の旭ガラス見学で終わっており、戦前から戦後初めてかけて人気のあった見学旅行をしのはせる。

また、大震災で研究資料、試験器具などが灰じんと帰したのを機に、研究材料と試験器具を充実させようとの応用化学後援会の設立趣旨も掲載されている。

同後援会は発足後間もなく応化会に合併された。

戦前の応化会で懐かしいのは、内幸町大阪ビル地階レインボー・グリルでの例会である。大坪教授の記憶では昭和四年には、すでにレインボーの例会は開かれていた。昭和八年四月の応化会報にはレインボー・グリルでの臨時役員会、例会の様子がつぎのようにのっている。

「第二二回、昭和七年十一月七日レインボー・グリルにて開催す。出席者は三十名、第五回卒業の小倉正照氏（印刷局）が『スタンド油の製造法の変遷に就て』と題して講演さる。豊富な材料を以て詳細な説明をして下さ

で盛大に行なった。

会報も大正十二年九月発刊の準備を進めていたところ、関東大震災で行方不明になった論文もあり、復興に追われて当分は編集会議どころでなく、大正十三年七月になって会報第一号の発刊をみている。

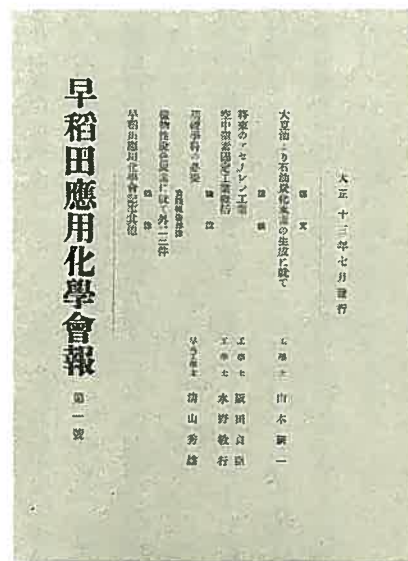
内容は山本研一氏らの学術論文の他に、雑録として山口教授の見学旅行の記が掲載になっている。

「三月二十四日。晴、午後九時半上野発、三学年生十

れ、吾々は興味深く拝聴することを得たり」

鎮目達雄氏（昭和十一年卒業）、棚橋幹一氏（昭和十二年卒業）が在学中だった昭和十年前後、例会は毎月六日にレインボー・グリルで開かれ、学生は特別会費で参加を許された。教師、ゲスト、OBがメンバーで必ず講演があり、洋食のフルコースが出た。学生は特別会費とはいえ一円程度の負担で、当時としてはかなりの金額だったという。

桑原幸二郎氏（昭和十一年卒業）は六日会について「新聞で学校紛争の記事を見るたびに、思い出されるのが往年の六日会のこと、今このような会合があったら、どんなものだろうかと考えさせられる。日ごろは怖いような先生方も、この日ばかりはなんとなく親しみ易く、まるで親父か兄貴のような気分で気楽に話ができ、ときには先生の講義の批判までして周囲をヒヤヒヤさせたこともある。こんなときでも先生や先輩は、なんら激すこともなく、懇切に答えてくれた」と思い出している。



応用化学会報第1号

また、春日井佐太郎氏（昭和十三年卒業）は「先輩、後輩が接触する良いチャンスだった。現在こういう会合がないのが残念」と。大友恒夫氏（昭和十四年卒業）も「当時は学生だったが六日会へ出席することで何だか大人の世界に初めて一步を踏み入れたという感想を持った。当時は肝付さんが貴族院の少壮議員として張り切っていて、六日会でもいろんな話を聞かされたのが懐しく、印象に残る思い出」と語っている。

その他、当時を知る人の多くが「学生、OBの数が増えて、もう一度やってみたい集まり」と異口同音に懐しんでいる。

六日会が盛会だった理由について、一六回生桑原氏には次のような思い出がある。

あるときクラス会の席だったと思うが、小林先生が「わが応用化学科は創立後未だ歴史が浅く東大にはやや劣るかもしれないが、他の大学には絶対負けないものと確信しておる。あとは諸君がこれから社会に出て、大い

に業績を上げてくれることだけだ」といわれた。

当時は、創立後十年余りしかたっておらず、卒業生の教授も一人もいなかった状態だった。それだけに先生方も卒業生も学生も、なんとか応用化学科をりっぱなものにしようという共通の目標があったのではないかと思う。それが当時の六日会の原動力だったのだ——と、桑原氏はいう。

例会は昭和十五年十二月の七〇回常会を最後に戦時中は遠慮、会報も昭和十九年三月以来発刊を中止したが、会報は昭和二十四年再刊をみている。当時の会長武富昇教授は再刊の辞で、日本再建に化学工業とその基になる化学が如何に重要であるかを高い調子で述べている。

この年は第三次吉田内閣が成立、シャウブ使節団が税制勧告案を発表するなど、戦後史が新しい歩みを始めていた。また、同年十月には、中華人民共和国が成立している。

応用化学会報は専門学術雑誌の増加とともに、学術雜

誌としての役割りが少なくなってきたため、昭和四十年三三巻七八号をもって「応化会だより」と形を変え、校友会雑誌的なものとして、現在は毎年二回位刊行されている。

2 今に生きる伝統、燃料化学科の九年

「近代社会は石油の中に浮いている」とまで言われるほど、石油の人間生活に与える影響は大きい。

昭和十二年に始まった日華事変は短期のうちに勝てる目算がはずれて長期戦となり、戦略物資としての石油の重要性は急ピッチで高まっていた。政府は昭和七年、早くも石油業法を設けて国内企業の育成と軍用石油の確保を図り、新会社の設立が相次いでいた。

しかし、新会社の大半は小規模、設備能力は石油業法の要求するギリギリの最低限だったので、設備投資が高度化するにつれ、製油所の合同問題が再び起こってき

た。またアメリカが昭和十五年一月に日米通商条約を廃棄し、石油、くず鉄の輸出禁止の構えをとったことも石油会社の強化を促進した。

その結果、中小会社は日本石油、昭和石油、丸善石油、大協石油に整理統合され、以上の各社に三菱石油、東亜燃料工業、興亜石油、日本鉱業を加えた八社に戦時石油産業は集約化されたのである。

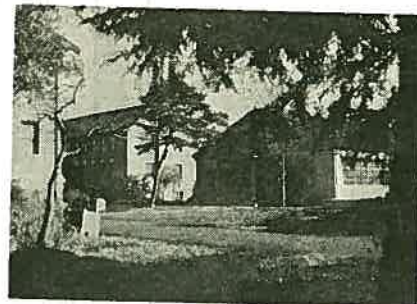
太平洋戦争の勃発で石油の重要性はいっそう高まり、早稲田大学は昭和十七年十月、応用化学科内に石油分科（十八年四月石油工学科と改称）を設けた。この年日本軍はマニラを占領、シンガポールを落としたが、八月には米軍がガダルカナル島に上陸、ソロモン海戦が行なわれるなど、戦局に転機のきざしがみえたところである。戦時体制下、上級学校の修了または卒業期は九月末となっていた。

石油工学科は当時の日本石油社長、小倉房藏氏の熱心な働きかけと、当時の金で百万円という学園創立以来の



小倉房藏氏胸像（小倉記念館内）

巨額の寄付により創設された。小倉氏は明治四十一年本学商科を卒業、その後ロンドン、ベルリンで学んだが、帰国後家業の石油精製業に従事した。戦時中、小倉石油は日本石油に合併され、同氏は副社長に就任、やがて社長になられた。そして、石油に対する情勢と母校愛から石油工学科の創設を建築科の内藤多仲先生を通じて主任の小栗先生に申し出られたのである。そのころ、小林先



石油工学科研究室



石油工学科正門



スコットホール



石油工学科内での運動会（昭和23年）

生はすでに退任されていた。

石油工学科は小林先生を顧問格に、山本、村井両教授、あとで大坪教授が加わって企画を進め、穴八幡裏手のバプチスト派宣教団の土地と建物（スコットホール）を求め、実験室を作って石油工学科の拠点とした。当時木材は統制下にあったので陸軍燃料本部を通じて資材を手、百五十坪の実験室を作った。

石油工学科について燃料一回生加藤忠蔵教授はつぎのように回想している。「石油分科は早稲田全線座の前の横丁を入った旧スコットホールと赤レンガの建物を事務所および教授室、その前にあった二階建の青い木造建物を教室および実験室として使用した。赤レンガの建物には、山本教授、大坪助教授、村井助教授、森田講師（昭和十八年より）など教授陣の教員室および会議室、事務室、技術職員のおられる器具室などがあった。横に三百名以上収容出来る大きな講堂があり、上記先生方による本科との合併授業はここで行なわれた。学生実験室は後

になって講堂の地下室と青い建物に設備されたが、当時は旧応用化学科の一階および二階の実験室で実験を行なった。研究室は青い建物にあったが、今からみるとさぶる余裕のあるもので、陸軍燃料廠の委託による戦時研究などが行なわれていたように思う」

しかし、通常の授業が続いたのは昭和十九年一ばいまでだった。二十年には工場だけでなく、市街地に焼夷弾が落下し始めた。やがて二十年五月二十五日、空襲により学生実験室だけは焼けたが、研究室などは教師、学生の懸命の消火作業により火を免れ、戦後の研究をスタートすることができた。

戦中から戦後にかけての学生生活を、西島公信氏（昭和二十一年卒業）は、「石油工学科だけのこじんまりした研究生生活だったので、今のマスプロ教育と全く異った心と心が通い会う教育を受けられたことが有難かった」といい、大久保総一郎氏（昭和二十二年卒業）も、「大変いいふんい気だった」と当時をふり返っている。

与える影響の大きさを指摘している。

敗戦により、わが国の石油産業は一時、その存在すら危ぶまれた。その一方、戦後の物資不足から、固体燃料もその地位が向上してきた。そこで、石油工学科は二十一年四月から燃料化学科に改称した。燃料工学科との説も出たが、内容からして化学科に落ち着いた。

しかし、新制大学では専門学科を小さく分けない方針をとったので、新制大学の発足を機に燃料化学科は応用化学科と合併、大学院制度の中で燃料化学専修とし、実



一回生が入学したのは昭和十七年、二回生は十八年、五回生になると戦後の入学である。赤林宏氏（昭和二十五年卒業）は海軍兵学校から復員後、昭和二十二年に入学したが、当時を思いだして、「召集逃れに理科系を志願し、本来は文科志望なのに燃料化学科へ来たという同級生も目立った」と戦中戦後の混乱した学生生活を語っている。研究をしようにも水道ガス、電気はとまり、激しいインフレによる生活の苦しさも研究意欲を下げた。そのころ、応用化学科や燃料化学科では特技を生かして、サッカリンやズルチンを製造し、ヤミに売る学生がいるなど、教師も学生も生活に追われた。しかし、間もなく正常な研究生生活が戻ってきた。

二十一年九月に二回生が卒業したころは、大変な就職難であり、ほとんどの人が燃料に関係のない各分野に分散していったが、現在では半数近くの人が燃料関係の仕事に従事している。「これはやはり、燃料化学を卒業したためかもしれない」とOBの一人は学生生活が人生に

質的に昇格されることになった。かくして、燃料化学科は、石油工学科としてスタートしてからの九年間に合計七回、百四十六名の卒業生を送って幕を閉じたが、応用化学科からは毎年石油業界に多数の人材を送り込むなど、その伝統を残している。

小倉氏の寄付された旧燃料化学科の校舎は戦後教団に返還、小倉記念館が旧応用化学科の続きに昭和二十九年再建され、理工学部の新校舎移転後も、ここで燃料関係の研究が続いている。小倉房蔵氏は小倉記念館の設置を目前にした昭和二十七年七月十七日、永眠された。

大限庭園内にある茶室風建築「完之荘」は、もと飛騨の国から小倉邸に移築されていたものを、小倉氏が移築費とともに寄贈され、ここに移したものである。

3 戦時下秘録

応用化学科に石油分科が発足した昭和十七年、戦時体

制はいよいよ強化され、翌年十月二日、勅令で学生に対する在学徴集延期制が撤廃された。十一月十五日には安部球場で、学園の学徒出陣壮行会が催された。病軀をさげて登場した田中穂積総長の訓示、激励のもと、教職員学友に送られた法文系の全学生六千人は、一時に学窓を離れていった。

謡曲「敦盛」にある「人生わずか五十年……」と信長出陣を謡った田中総長一代の凄絶悲愴な告別辞や、安部球場を埋め尽くした出陣学徒の姿は、今も臨席者の脳裏に焼き付いている。

かくして戦争遂行と工業資材の確保に必要な理工科系の学生を残して、文科系の全学生は出陣して行った。いまなお語り継がれている雨の神宮外苑での全都大学合同の学徒出陣壮行式も、つづいて行なわれた。

当時の学生は常時詰襟の正服とゲートル姿、教職員も同様な姿で鉄帽を背中にぶらさげていた。

研究も不急なものでは中止させられ、陸海軍の委託研究

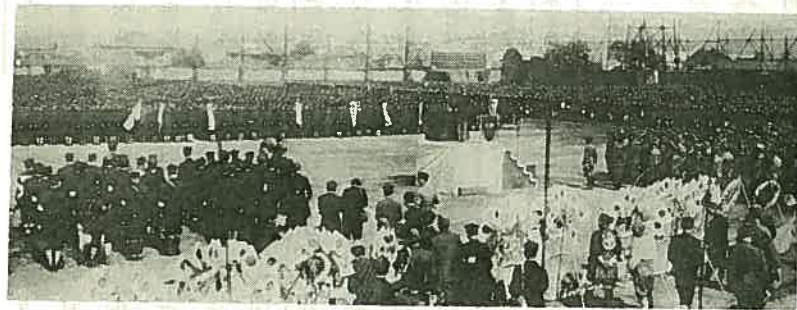
のエピソードも戦局窮迫を物語るものであった。

当時文部省では大学における研究者の温存のために全国大学に特別研究生制度を設けた。これに該当する者は徴兵と動員を免除され、大学の研究室に残り研究を続行した。現在教室におられる城塚、加藤、鈴木、宮崎各教授はこの特別研究生であった。

また、理科系の学生には徴兵猶予の特典があったので、入学志願者がふえ、入試がむずかしくなった。第一高等学院の入試日は一高と同じだったので、どうしても早稲田へ入学したい学生が多く集まっていたが、理科系人氣が加わったので、応化へはいっそう入りにくくなったという。

一方、勤労働員は回数を増し、出動は長期にわたり、ついには、「通年動員」となって学業をほとんど放棄せられることになった。これより先、昭和十四年から就職先は割当制となっていたので、就職内定先への動員のケースも多かった。

がふえた。山本教授は陸軍、小林、村井両教授は海軍の研究を引き受けたが、このため資金はもちろん、実験用の資材は比較的潤沢だった。研究内容は合成潤滑油、接触分解の触媒、ヤン油からの石油合成、ブタンの合成などだった。軍の研究の委託を受けた研究室が優遇される反面、軍の研究をしていない宇野教授が教え子の学生といっしょに召集を受け、学生を驚かすなど



安部球場における学徒出陣

応用化学科を昭和二十年に卒業したクラス（旧制二六回）は大日本製鉄（広畑）、日曹へ動員のとと海軍技術研究所へ回された。旧制二七回生は日本水素、旭電化、日清製油などへ分散動員された。

田中甫氏（昭和二十一年卒業）は学部一年のとき、日本砂鉄の飾磨工場（いもの工場）の現場に一、二カ月動員されたあと大学にもどり、戦時研究についていた石川研究室に配属された。

「日本砂鉄では二年生が分析室だったのに、一年生はいもの工場で分が悪かった。そのころ石川先生は陸軍燃料廠の技術将校として勤務されていたので、軍服姿で講義に来られ、初めての講義に遅刻したところ、扉のすき間から軍服姿が見えて、教練の先生の授業と錯覚、廊下でまごまごして級友に笑われた」と、田中氏は思い出を話している。

燃料二回生は日本石油下松製油所で松根油の航空燃料化の実験を手伝った。「ガソリン一滴は血の一滴」との

スローガンを掲げ、全国的に松の根を掘り出していたところだから、学生は髪の毛まで松根油のにおいがしみ込むほど働き、ときには空襲による負傷者をたんに乗せて病院まで走った。

燃料三回生は、福島県西白河郡西郷村へ動員された。甲子温泉と白河の間あたりである。小学校に止宿して、付近に産する草炭を乾留、草炭タールを収集するのが目的だった。石油不足の当時、草炭も大いなる資源であった。

小野裕二郎氏(昭和二十一年卒業)らは、掘り出した草炭を天日乾燥して煉瓦大にし、乾留釜にかけた。竹をパイプ代わりに使った作業で、収率はもちろんいいはずはなく、回収量は二、三％、ドラムかんに二、三本溜まっただけだった。しかも酸性が強く使いものにならなかったが、乾留後の炭は東京からトラックが取りに来ていた。この炭は東京の木炭バスの燃料に使われたとのことである。

空襲がないのは天国だった。しかし、いなかとはいえ食糧は十分でなく、宿舎の小学校にはふろもなかった。学生たちは、近くの農家に買い出しに出たり、貰いぶろをしたものである。

燃料三回生が入学したのは、昭和十九年十月である。その年すでにサイパンはおち、十一月にはB29による東京への偵察飛行が開始された。連日防空演習や勤労動員が行なわれ、学生として一応通学して授業を受けられたのは理科系学生だけであった。

戦局の悪化にともない、空襲はひんばんとなり警報のたび貴重な授業は中止され、その都度、教員、学生は地下室へ退避した。

加藤教授は「昭和二十年になってからは夜の宿直も始まり、一回生は交替で先生方とともに地下室に泊まり、何回も警報がなるので寝ることも出来ず、先生方に麻雀を教授して頂いたことなどは、今では考えられないことである」と回想している。

戦争終結の大詔発さる



戦災を受けた恩賜館

二十年二月には学徒消防隊が結成され、帝都防衛の役割も分担した。二七回生は四谷消防署に配置されたが、早稲田の学生の多くは下町の消防署に配置された。このため昭和二十年三月十日の東京大空襲の折には、二七回生のあとをうけた二八回生の多くが、下町へおもむいて死んでいる。前記小野裕二郎氏は、「高等学院以来の友人原田君が消防車とともに行方不明になるという痛ましい犠牲を払った」と追憶している。

こうした状況の中で、落ち着いて勉強にいきしむヒマもなく、昭和二十年組の卒業論文の成績は動員先の仕事で代えられた。しかし二十一年組の卒論は早くも戦前同様に審査された。

二十年四月、決戦教育措置要綱が実施され、国民学校初等科以外の一切の学業が停止された。この月、東京山手地区に大空襲があり、学園の教職員、学生の多くが罹災した。続く五月二十五日、山手地区へ重ねて大空襲があり、学園の三分の一が焼失したのである。恩賜記念館



戦災を受けた理工学部実験室

全焼。商学部校舎は半焼、文学部校舎は三、四階が焼失し応用化学科は幸い焼け残ったが、石油工学科は研究室とスコットホール、寄宿舎を残して焼失するなどの被害を受けた。

戦局はいつそう不利になり、学生の中には勤労動員先で爆死する者も出て来た。

三 化学工業は不死鳥

1 軌道にのる復興

昭和二十年九月八日、学園は授業を再開した。総長中野登美雄氏は、全学生に向かい「新時局に鑑みて」の訓示を行なった。復員学生の復学、軍関係学校生徒の転入学、理科生の文科への転科があわただしく、大量の転入学のため学園は大変な教室不足だった。

応用化学科の学生は、「新生日本の基本は化学工業から」と、再び研究に取り組んだ。それも、戦後間もなくは陸海軍の特殊物件の処理とやらで狩り出され、西に東に旧軍関係の諸施設から、薬品、計器、装置などの運送役で働かされた。新しいものが購入できなかった折か

山本教授は同年夏、軍の派遣将校から「いよいよ最後の決戦の覚悟を……」とひそかに言われ、学生といっしょに、相模灘か鹿島灘の海岸に塹壕掘りに出かける覚悟をしていた。そして八月十五日、森田義郎教授（昭和十八年卒業）は大学で終戦の詔勅を「ほっとした思い」で聞いた。混乱の中を、学生たちはそれぞれの動員先から、わが家へ引き揚げていった。

ら、集めてきたものは各研究室でそれぞれ役に立った。旧制二七回生田中甫氏は、「卒論のテーマは十月ころもらい、十一月上旬から着手したが、肝心のガスは五月の空襲で全く出ないので、電気炉を用いて焼成するほかなく、それも電力の余裕がないため、夜中にやっと電気炉の温度が上昇し、珪酸塩分析のためのアルカリ溶融がやっとできる状態だった」と回想している。そのため学生は連日廃墟の大学に泊り込み、卒論研究を実施した。そして二十一年九月、前年は中止のやむなきに至った卒論発表会が、応化四階西側の教室で行なわれた。用紙の十分でない時代だったので、図表を新聞紙に書いて発表する学生もいた状況だった。

敗戦の日本はあげて民主主義体制の確立を急いだが、早稲田大学では二十一年五月、昭和四年以来の校規を廃止、総長以下、役員ならびに各学部科および付属学校、付属機関の長はすべて公選とする新校規を実施した。

六月十九日、総長選挙では商学部教授島田孝一氏が当

選、九月の各学部長、科長の公選ではわが応用化学科の山本研一教授が理工学部長に当選した。

山本教授は理工学部長として三年間、学内の山積する難問に取り組んだ。そしてこれまでの主任会のほかに、いろいろな委員会を作り立案を求めた。また、教授会を開き、その支持を得て仕事を進めた。

「会議のおやつに一貫目三十円也のさつまいもをふかして出して喜ばれたこと、もらったアルコールを水で三〇％に薄め、砂糖をこがしてかっ色にした怪しげなウィスキーを学部長の懇親会に出して大かっ采された思い出も忘れられない」と、山本名誉教授は当時の食糧難を懐しんでいる。

山本理工学部長をメンバーの一人とする教育制度改革研究委員会、同委員会の後を承けた教育制度改革委員会、さらに二十三年発足した各学部および高等学院設置委員会などで、新制学部設置の準備が進み、各委員会での検討結果を総括した早稲田大学設置要綱ができ上がり、昭和二

充費”なるもの（当時三千円）を、世論の反対を覚悟して実施に移した。幸いに社会の支持を得て、その後の母校の再建はこれに負う所大であった。

新制応用化学科へは高等学院一、三年生のほか専門部から三年生に若干名、一年生に約半数が加わった。学生たちは陸士、海兵など軍関係者が多く、年令もまちまちだった。

このころ、学生から夏季工場見学旅行をしたいとの申し出があり、篠原教授が教室会議に計ったところ、会社の先輩に迷惑をかける恐れがあり、時期尚早との意見もあったが、結局同氏が引率して関西、中国、九州の工場を見学した。

見学旅行はその後ずっと続いたが、このとき見学した工場数は最高だったという。

昭和二十五年六月朝鮮動乱が勃発、これを引き金に日本の復興は急ピッチで進み始めた。しかし動乱の不安から買いため、売り惜しみが始まり、同年十二月には池田

十四年四月一日、新たな構想による早稲田大学が十一学部で発足、山本教授は新制第一理工学部長に就任した。

新制学部の設置によって、高等学院・専門部各科・専門学校の学生は次の基準と要領で新制学部へ移行した。

一 旧制高等学院生は全員、一年修了者は新制学部一年へ、二年修了者は同二年へ、三年修了者（卒業者）は同三年へ移行させる。

二 専門部、高等師範部、専門学校学生で一年修了者は全員、二年以上は希望者のみそれぞれの系統の新制学部へ移行し、希望しない者は旧制のまま卒業させる。

三 旧制学部は昭和二十四年四月入学の分から新規募集を中止し、在学生は旧制のまま順次卒業させて、昭和二十五年（一九五〇年）度で自然廃止になる。

新制大学出発時の学費は理科系八千五百円、文科系七千五百円、新入生は理科系一万円、文科系八千五百円、納入は四期分納制であった。

またこの時わが国で初めて母校復興のための“施設拡

蔵相が「所得の多い者は米、少ない者は麦を食べるよう」と発言して物議をかもしている。また、占領軍教育顧問W・C・イールズの赤色教授追放声明に反対する学生と警官隊が学内で衝突、これを皮切りに学生大会、学内デモ、試験ボイコットが続くなど、学生運動が活発になり、一時は小康を得たが、昭和二十五年五月八日の午後から翌九日の払暁にかけての「五・八早大事件」で再び火花を散らすなど、学生運動が激しかった。

こうした悩みを持ちながら、早稲田大学は十月、創立七十周年記念式典を迎え、式典には国内、国外の大学代表、校友、学生、役員、教職員各代表約三千名が集まり、喜びをわちあつた。そして翌二十八年には大学院博士課程が発足するなど、早稲田大学はまた新しい前進を始めるのである。

2 多様化の時代へ

昭和三十年代の化学工業は戦前に確立した石炭化学、電気化学を石油化学に衣替える転換期だった。「肥料二法」によって硫安の合理化を迫られた化学工業会社は活路を高分子合成化学工業に求め、主原料を確保するために石油化学コンビナートの建設を急ぎ、化学工業の質的転換がスタートしたのである。

昭和三十二年には「日石化学川崎コンビナート」がスタート、丸善石油・下津工場で日本における最初の石油化学製品MEKを製造した。いわば日本の石油化学、高分子化学の黎明期ともいえるこの三十二年、早稲田大学は創立七十五周年、応用化学科は四十周年を迎え、十月の早稲田祭に応用化学科では当時の三年生が中心となってメインテーマ「化学は人間生活を豊かにする」の展示を行なった。内容は石油および石油化学工業、合成樹

脂を主体に無機化学、油脂、発酵工業を紹介したもので、当時ビエンナーレに入賞した建築展と並んで会場の人気を集めた。

この年応用化学学生会部会では大教室で「石油工業及び石油化学工業の現状」についての講演会を開き、山本先生が演壇に立ち、当時米国から帰国したばかりの柴田和雄助教(昭和十七年卒業、現在理化学研究所)は、スライドを使って米国の状況を説明している。

余談になるが、当時応用化学科の新生からとったアンケートでは、早稲田に入學していちばん感激したのは一位早慶戦、二位早稲田祭となっている。昭和三十年の応化展に森永関係を展示したところ、例の粉ミルク事件の質問が集中して柳沢亘氏(昭和三十三年卒業)などが困ったというエピソードもある。

四十年十一月の応化展では公害の実態とその解決策をテーマにしたもので、学生たちは夏の暑い盛りにメッキ工場を見学したり、排水処理装置を検討した。学生の思

い出では、当時は先生方の反応もさまざまだったという。「いま考えるとこのテーマが当時からもっと深く考えられていたら、昨今の社会問題も違う方向にあったのではないか」と反省の声もある。

応化展が開かれる理工学部展は歴史が古く、また、戦前、戦中派に喜ばれた工場見学会は一時中止されたが、最近では応化会の主催で行なわれている。

さて、四十周年を迎えた三十二年十月、応化会では会報六五号を発行、その中で前会長武富昇先生が「応用化学科創設四十周年をかえりみて」と題してその歴史と現況を記している。

これによると、当時の定員は六十人、入学試験の際の志望者は定員の三〇倍以上に達し、求人の申し込みは卒業生の数倍になっている。教授、助教授、専任講師の数は十七名、大正九年、十年ごろの三倍強である。応化会員は約千八百名、毎年六十名くらいずつふえている。

武富会長は「早稲田大学は校友と大学との関係が特に

密接であるように思うが、応用化学科でも卒業生諸君がよく母校と後輩の面倒をみておられる」として旧制二回生肝付兼英、同水野敏行両氏に感謝の辞を述べ、さらに「今後の発展のためには、広く学界より人材を求めて応用化学教室の陣容を強化することが重要である。研究意欲を高揚して、すぐれた研究、発明を当応用化学教室より発表し、また優秀な卒業生を多く日本の化学工業界に送り出すことは、われわれ教室側に課せられた責任であると思う」と抱負を述べている。

この年の一月には第一次岸内閣が成立、新聞の社会面では米兵ジラードが、相馬ヶ原演習地で農婦を射殺した事件が紙面をにぎわしている。神武景氣と言われたのもこのころである。早稲田大学では、七十五周年記念事業として戸山町旧第一高等学院跡に一万名を収容できる記念会堂が完成した。この記念会堂は、昭和三十九年秋フエンシングのオリンピック会場となった。

昭和三十八年九月には、西大久保の理工学部新校舎第

一期工事が完成、教養課程の授業は新校舎で始まった。
小櫃正道氏（昭和四十二年卒業）は三十八年一年生の時は本部キャンパス、三十九年教養課程は西大久保、専門は本部、四十年は専門を本部、四十一年は卒業実験を本部、専門を西大久保キャンパスと毎年根拠地が移動した。四十二年四月には応用化学科が西大久保新校舎へ移転、同十一月には新校舎第三期工事が完成したのである。

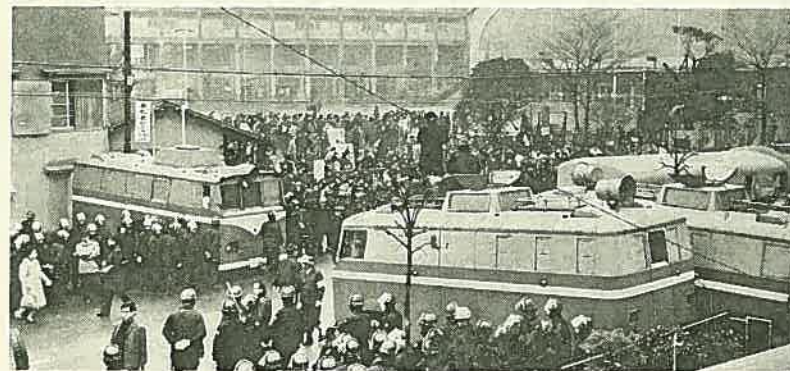
昭和四十年ごろには授業料値上げ反対が口火となつて、いわゆる第一次早稲田闘争が始まった。翌年一月にはこの他第二学生会館管理運営をめぐる闘争も加わり全学部がストに入った。応化はもちろん、理工学部がストに参加したのはこれが初めてである。二月二十一日には警視庁機動隊が出動、学生二百三名を検挙した。このため全学の卒業式はできず、代わって応用化学科だけの卒業式が行なわれた。見方はいろいろあるが、学校や教室の在り方について、さまざま考えさせられる時期だった。ちなみに早大の学費は昭和三十年ごろまでは一年おき

が負担が大きくなっていくことに疑問をもった者たちの反対運動として始まったものであった。

昭和四十三年から始まった第二次早稲田闘争は、政治面では大学管理法および七〇年安保の阻止運動、また他方学園の問題では日大、東大闘争により口火を切られた根本的に大学、そして学問、研究、教育のあり方を考え直そうとする動きの両者が重なって始まった。翌四十四年には理工学部内で軍事研究問題が起こり、これに産学協同の問題も加わって理工学部は大きく荒れ、五六号館（学生実験室）および五一号館二階の学部長室などが占拠される事態が起こった。当時の学部長村井資長教授と大学院委員長葉山房夫教授（金属工学科）は何度も理工学部キャンパス中庭、および五七号館大教室における“団交”で長時間監禁状態となり、村井学部長は遂に疲労のため入院し、吉阪隆正教授（建築学科）にその席をゆずった。理工学部および応用化学科におけるこの紛争は時間がたつと共に焦点がぼけて、不信任、しこりが完

に改訂されているが、その後は三十三年、三十五年、三十七年、四十四年、四十七年に改められ、応用化学科では、三十七年の八万円が四十七年には二十万円に値上げされた。

この学費値上げ反対闘争は、教育の機会均等が叫ばれている中で、私学のみ



学園紛争、記念会堂および文学部キャンパス

全に取り去れないまま終了した。しかしこの大きな教訓をふまえて、少しでも理想的な学園に近づくため、多大の努力が現在なされていることはもちろんである。

村井教授は、四十五年十月には時子山総長のあとをうけて総長に就任、現在に至っている。

また四十八年四月には理工学部化学科が発足した。化学科は物質の世界を原子分子の立場から探究、工学技術の基礎である現代化学を学習することを目的とする。とくに最近著しい発展をみせている構造化学、量子化学の学習を特色とした応用化学科の姉妹学科である。

工学を発展させるためには、その基礎である理学と協力することが宿命で、純正化学科の設置は、戦前からの理工学部の悲願であった。

戦後、応化の運動会は甘泉園や浜田山で行なわれた。かなりさかんだったのは昭和三十二、三十三年ころの野球大会、最近では四月末に新入生歓迎会を兼ねた運動会が上井草で開かれている。また、長い歴史を持つ理工の

ボートレースが昭和二十九年ごろ隅田川で復活、応化生の何人かもレガッタのオールを握った。このボートレースは、最近では河口湖で行なわれている。

応化の早慶戦が行なわれたこともある。昭和三十三年、春の六大学リーグは慶応が優勝した年だった。そのお返しをしようとわが応化の面々は小金井の慶応工学部に集まった。当時の世話役は慶応が梅沢、永井両教授、わが方が宇野、篠原両先生である。その結果、野球は一勝一敗、庭球はわが方の一方的勝利で終わり、ビールで乾杯して別れた。この早慶戦は一、二回で終わったが、先生同士の早慶懇親会は現在も続いている。

日本経済の高度成長にともない卒業生の就職はしだいに容易になり、また価値観も変わって技術畑や研究畑だけでなく、商社や専門職の官僚になる人も出ている。新制八回生では卒業生の三分の一以上が石油精製、石油化学関係に就職しているが、商社へも約一〇%が入社している。

行なわれるようになり、特に理工学部設備がこれにより大幅に改善された。

一方、昭和三十年代の経済の高度成長にともない理工科系卒業生に対する期待が大きくなり、進学者はふえ、また研究設備の高度化とともに、早大理工学部は校舎・研究室の狭さを強く感じるようになってきた。そこで当時の大浜信泉総長は、理工学部を現在地（旧陸軍戸山ヶ原射撃場跡）へ移転させるべく、早稲田大学創立八十周年記念事業の一つとして、広く社会へ寄付を求められ



新理工学部遠景（新宿付近から）

3 新制大学から大学院大学へ

新制大学の特長は、旧制大学が余りに専門的、職業的な教育を実施した結果、自主性や批判力にとぼしい人間を造り出したとして、人間育成を旗印に一般教育という太い柱を建てたことである。細分化された高度な学問は大学院で行なうということで、新制大学院制度が新しく置かれた。燃料化学科が廃止され、応用化学科に合併されたのも、この思想から来るものであった。

しかし歴史的にみると電気工学科、電子通信学科のように燃料化学科をそのまま存続させるか、少なくとも金属材料研究所のように、燃料研究所のような形で残しておいた方がよかったのではないかという意見もある。

新制大学となり、進学者が増大するとともに、大学教育に対する私学の責任も次第に重視され、やがて、国家予算による研究費助成、理科助成などが文部省を通じて

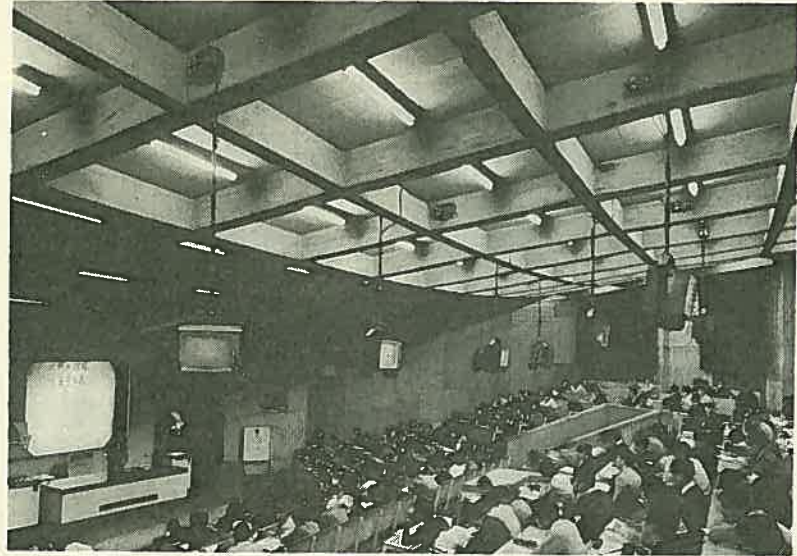
たのである。

この計画の立案、実施には、当時大学理事として大浜総長の片腕だった応用化学科の村井資長教授が当たり、総額二十一億円を集めることができた。

新理工学部建設は当時の学部長難波正人教授（機械工学科）のもとで計画され、昭和三十七年十二月に納入以来五カ年余、総工費二十八億円で三期に分けた工事の九〇%は昭和四十二年三月に完成、同年四月から使用を始めた。

設計は建築学科の安東、穂積両教授。地上六〇メートル、一八階、地下二階の五一号館を中心に、その回りに教室、学生実験室、機械工学科、電気工学科などの建物を配置、霞ヶ関ビルが完成するまでのわずかな間、この五一号館は東洋一の高さとエレベーターの速さ（分速二四〇メートル）を誇ったのである。

それにしても、今でも展望は良く、天気さえ良ければ富士、丹沢はもとより、遠く日光の山々も手にとるよう



57号館 450 人教室

である。

難波構想にしたがい、建物だけでなく、すべてに合理化が行なわれ、今まで各学科に属していた事務所、図書室などを中央に集め、地下一階を理工学部図書館、一階を中央事務所として、各学科には学生定員に応じて一名～三名の連絡事務員を置くのとし、研究室の占有面積も学生定員がかなり加味された配分となった。

学生定員は理工学部で千七百十名（現在は化学科増設により千七百四十名）で、応用化学科は百四十名。最高は機械工学科の四百四十名で、電気工学科の二百四十名が続いている。

現在応用化学科は工業化学コース研究室として五一号館八階の半分、九階の全部および一〇階の半分を使用、主として化学系共通機器室として理工学研究部所轄の部屋を使っている。設備は一〇階に赤外、紫外可視分光器、高分解能核磁気共鳴装置（簡易型）、X線分析器、熱分析装置などを置き、地下二階に大型磁気共鳴装置

（NMR・ESR）、質量分析装置（大型、簡易型）があり、また地下一階に高圧室、炉室、さらに五六号館に元素分析室、電気化学分析室などが配置されている。

化学工学コースは、六〇号館に研究室と学生実験室がある。

学生実験室も、いままでいくつかの学科にまたがっていたものはまとめて共通実験室とし、各学科に特有なもののみコース別実験室としておいた。共通実験室は、職員別にみると第一課（材料）、第二課（工作）、第三課（電気工学）、第四課（工学基礎）、第五課（化学分析）の五つに分かれている。応用化学科では物理実験、化学実験（一年）、工学基礎実験、分析化学実験（二年）、物理化学実験（三年前期）を共通実験室で行ない、工業化学実験、化学工学実験（三年後期、四年前期）をコース別実験室で行なっている。

新校舎の余りに合理化された設計に対しては、利用者に対する配慮が足りないとの不満の声も聞かれた。ま

た、応用化学科はもともと森村豊明会、小倉房蔵氏からの寄付のおかげで、他の学科に比べ比較的建物に余裕があったため移転に積極的でなく、多数数教育に対しても首をかしげる教員がかなりいたが、理工学部の大勢に従い結局、移転に同意した。

新制大学制度と同時に新制大学院も設置され、実際には修士課程が昭和二十六年から、博士課程は昭和二十八年から始まった。理工学部には工学研究科として機械工学、電気工学、建設工学、鉱山及金属工学、応用化学の五専攻が置かれ、昭和二十九年度からは応用物理学専攻が増設された。

応用化学専攻には当初、高分子化学（小栗）、電気化学（富井）、燃料化学（山本）、醗酵化学（武富）の四専攻が置かれた。

小林先生から受け継がれた「応用化学は化学を応用する学問である」という思想は現在でも正しいが、学問が進歩するにつれ、応用化学でも基礎の学問の上に立つも

のであることが要請されるようになった。このため、新制大学発足当時、ほとんど旧制のままであったカリキュラムは、何回か改訂されて基礎科目が重視され、無機化学、有機化学、物理化学などの講義時間が大幅に増加している。

この考え方は研究面にも反映し、その現われとして大学院の専修も昭和三十三年には無機化学、化学工学各専修が出来、さらに有機合成化学（昭和四十二年）、物理化学（同四十四年）、有機化学（同四十八年）、の各専修が増設され、また食品醸酵も応用生物化学と名称を変更（昭和四十八年）された。

研究科も理工学研究科と改称され、大学院専攻は新設の化学科と共通である。

基礎面が重視される一方、化学工業の大型化は化学工学系の技術者を多数要求するようになった。早稲田大学応用化学科では大正時代、他大学に先がけ小林先生が化学工学の講義をされており、工業化学と化学工学との調

大学院では、昭和三十七年度から実施された入学推薦制度により、優秀な学生の大学院進学希望を盛り立てることになり、学部卒業生のうち約五十名が大学院修士課程に進学するようになった。また、博士課程への進学者もふえ、毎年数名の課程による博士の誕生をみるなど、大学院制度も次第に軌道に乗って来た。

カリキュラムの改訂で大幅なものは、理工学部全体として昭和四十三年に行なわれた。それまで理工学部では卒業に必要な単位数は一六〇で、特に二年生の時間割がぎっしり詰まっていたが、もっと自由な時間を与えて勉強させるべきだとの意見から、総単位数は一四六に切り下げられた。

応用化学科でのカリキュラムの大規模な改訂は、昭和四十五年に行なわれた。その主な内容は①基礎学科を重視し、古くからあった「工業化学」の講義を極端に減らした②学生の選択の幅を広げるため必須科目数を減らした③多人数教育の弊害を除くため、低学年に小人数のク

和のとれた体系は、創設期からの応用化学科の特長の一つだった。

昭和三十三年には他の私立大学に先がけ、大学院に化学工学専修を設置した。さらに昭和三十六年度入学の学部生から、高度の専門技術者養成のために工業化学コース、化学工学コースを設け、より充実した教育体系をととのえた。

これにより、低学年では無機化学、有機化学、物理化学に加えて化学工学等の基礎科目、またそれらと密接に関連のある基礎専門科目を修得し、高学年では工業化学コースと化学工学コースに分かれて、それぞれの専門科目を十分に修得できるようにした。

応用化学科百四十名の学生のうち、工化コース百名、化工コース四十名である。西大久保へは化学工学コースが工業化学コースより早く昭和四十年に移転、この移転により大型研究実験装置の設置が可能となり、化学装置の大型化時代にふさわしい研究、教育の場となった。

ラスを設けたこと——である。③を具体的にいうと二年生を十人〜十二人クラスに分け、各教員が分担して演習科目を課することで、大きな効果をあげている。

応用化学科は、これまで諸先輩の努力で大きく発展して来た。しかし、その将来に全く不安がないわけではない。

応用化学科の将来は、理工学部の将来と運命を共にしている。理工学部の将来のあり方については、昭和四十七年五月に将来計画第一次委員会が、昭和四十八年十一月に第二次委員会が設けられ教育、研究、キャンパス計画、百周年記念事業、事務および技術組織の各分野について討議されてきた。その内容について、委員の一人である加藤教授は次のように語っている。

「現在、大学への進学率が全国で三二%（東京地区で五〇%）となり、大学の大衆化と多様化が進むなかで、今の多数教育を続けてゆくならば、早大理工学部は平均化された大学の中に埋没し、忘れ去られてしまうであろう

う。先輩の築いた地盤を引きつぎ、さらに発展させるためには教育と研究の主体を漸次大学院に移行させ、内容の充実を図る必要がある。

現在の設備、教員数は学部教育のために考えられたもので、大学院拡充の要請に応えていないことは、理工学部の将来にとって重大な問題である。

主要国立大学が、大学院大学としての形態を整えていきつつある現在、早稲田大学においてもその比重を大学院の方へ移し変えてゆかねばならない。

ところが、応用化学科をはじめ理工学部各学科の教員の年令構成は、典型的な逆ピラミッド型であり、若手教員の欠如は致命的といえる。これを打開するためには、優秀な若い力を注入することが緊急の問題であるが、そのためには博士課程を中心とした大学院を拡充して、研究と教育の内容も学部、大学院の一貫教育を行なうか、別々の専門教育を行なうかについて、慎重に討議してゆく必要がある。

もう一つの問題点は、研究室の狭隘が研究充実の最大のネックになっていることである。幸い将来計画委員会では、高層の五一号館（一八階建）の中程（八～一〇階）に化学系研究室のあることは災害の面から重大であることを認識され、六号館（現在化学系学生実験室）の東側グラウンドへの移転を勧告している。この勧告に基づいて近い将来、新しい化学系研究室が新築され、教育、研究、設備の三拍子そろった応用化学科の生まれることを期待する」

大幅な国庫助成による私大の経営面での強化とともに、教育研究に対する大きな自覚が、応用化学科になっっている現在のスタッフに要求されているのではないだろうか。

譜料

年資

15. 12	早稲田応用化学会常会，第70回目を内幸町大阪ビル内レインボーグリルで開催。以後，戦時遠慮。
昭和 16. 3	小林教授退職。 <i>支那の支那化により，以後 開校と遠慮。</i>
17. 10	応用化学科に石油分科新設。
18. 4	石油分科，石油工学科として独立，山本教授学科主任就任。
⑥ 19. 2	早稲田応用化学会報53号発行。以後6年間休刊。
20. 5	5月25日の空襲で学園，理工研，大隈会館などのコンクリート建築物を除き殆んど焼失，石油工学科教室実験室焼失。
⑦ 20. 9	石油工学科，第1回生卒業。武富教授，学科主任，応用化学会会長就任。 <i>昇</i>
21. 4	石油工学科，名称を燃料化学科と改称。
21. 10	山本教授，理工学部長選任。
22. 7	応用化学科実験室内設備資金の寄付募集，同募金により4階に実験室を造り，また化学工学実験室の設備を改善した。
24. 4	新制早稲田大学に移行，11学部。 <i>山本教授に就任</i>
② 24. 9	武富教授学科主任退任，小栗教授再選任。
⑧ 24. 11	早稲田応用化学会報54号，復刊。
25. 10	10月9日応用化学科創設30周年記念祝賀会を大隈講堂，記念祝賀パーティを大隈会館で開催。
26. 3	応用化学科，新制第1回生卒業，燃料化学科廃止（応用化学科に合併）。
26. 4	新制早稲田大学大学院，6研究科修士課程創設，工学研究科応用化学専攻には高分子化学，醗酵化学，電気化学，燃料化学の4専修設置。
28. 4	大学院，6研究科 博士課程設置。
29. 2	小林名誉教授逝去（29. 2. 7）。
⑩ 29. 9	山本教授，学科主任，応用化学会会長就任。
⑪ 30. 11	小林先生ご遺族より40万円寄付，これを基に小林基金募集，募金65万円，計105万円（49. 1. 31 現在274万円に増加）。
32. 3	小栗教授定年退職，名誉教授に。
32. 9	宇野教授，学科主任就任。
⑫ 32. 10	早稲田大学創立75周年ならびに応用化学科創設40周年を記念して会報65号発行。 <i>応用化学</i>
33. 4	大学院に無機化学，化学工学専修新設。

I 応用化学科・応用化学会年譜

年 月	で き こ と
明治 41. 2 (1908)	早稲田大学第2期拡張計画として理工科を創立し，機械，電気，探鉱，土木，建築，応用化学の6学科を漸次設置することに決す。
41. 5	理工科の創設に対し，明治天皇より金3万円のご下賜金あり，これを記念し恩賜記念館が着工され，明治45年5月竣工す。
大正 5. 4	応用化学科予科が理工科予科のなかに合同して開設。
6. 5	河合勇，教授，応用化学科主任として就任。
6. 7	富井六造，教授として就任。
① 6. 9	応用化学科，本科（3年制）の授業開始。応用化学科創立の起点とする。
7. 1	森村豊明会よりの寄付により赤煉瓦実験室が本部キャンパス内，現6号館南側棟に着工，10月に竣工。
7. 11	河合教授退任，小林久平，教授，学科主任として就任。
9. 4 (1920)	新大学令による大学となり，理工科を理工学部と改称。
② 9. 7	旧理工科応用化学科，第1回生卒業。
9. 9	武富昇，助教授として就任。
10. 4	松井元太郎，教授として就任。
12. 3	新大学令による理工学部応用化学科，第2回生，第3回生同時に卒業。
③ 12. 5	早稲田大学応用化学会創立，恩賜館教室で創立総会開催，小林学科主任，会長就任。 <i>初代</i>
12. 9	関東大震災で応用化学科実験室の薬品室より発火，同建築物全焼。
12. 10	応用化学科後援会設立，卒業生その他より寄付を集む。
④ 13. 7	早稲田応用化学会報第1号，創刊。
13. 9	焼失実験室跡に仮実験室竣工。森村豊明会より寄付あり。
昭和 2. 4	講師小栗捨藏，教授就任。
3. 9	松井教授退任。
11. 9	本部キャンパス現6号館の一部として応用化学実験室講義室などの本建築竣工。11月1日竣工祝賀式開催。
⑤ 12. 4	小林学科主任退任，小栗教授主任就任，同時に会則により応用化学会会長就任。 <i>捨藏</i>

(学科主任の会長とすの旨を定む)

48. 4	理工学部化学科設立，大学院に有機化学専修新設，応用生物化学専修名称変更。
昭和 49. 4	応用化学会創立50周年記念事業の一つとして『早稲田大学応用化学半世紀の回顧』を発行。

註．専任教員の就任については学科設立当初のみ，また退職などについては教授のみ記載した。

51. 5 鎌田達雄 会長就任
52. 5 大友恒夫 ”
55. 9 篠原教授 ” (3月号)
54. 7 応化会より 第26号をもって休刊、早稲田応用化学会報 新装第1号発行。
54. 10 新築された 第65号館 (化学新棟) 見学会を開催
54. 3 化学系新棟 竣工
54. 4 会則大改正。会計細則の制定。
53. 10 運営資金募集 (目標額 1,500万円に達し 実現)
54. 11 名誉会員推薦規則の制定。
55. 5 会則改訂
56. 3 会費改定 1981 版発行

34. 6	富井教授定年退職。
昭和 35. 1	小栗名誉教授逝去 (35. 1. 3)。
35. 9	石川教授，学科主任就任。
35. 10	宇野教授，理工学研究所長就任，山本教授，大学院工学研究科委員長就任。
36. 4	応用化学科入学定員を60名より100名に増員，カリキュラムに工業化学，化学工学のコース別実験講義を設置， <u>応用化学会則を変更して肝付兼英会長就任。</u>
38. 4	応用化学科入学定員を140名に増員。
39. 1	宇野教授逝去 (39. 1. 2)。
39. 3	石川教授，理工学研究所長就任，吉田教授，学科主任就任。
40. 4	化学工学コース実験室研究室，西大久保キャンパスに移転， <u>水野敏行応用化学会会長就任。</u>
40. 8	<u>応用化学会報休刊とし応化会だより1号発行。</u>
41. 3	山口教授定年退職 (42. 6. 19 逝去)。
41. 9	大坪教授，学科主任就任。
41. 10	村井教授，理工学研究所長就任。
42. 3	武富教授定年退職，名誉教授に。
42. 4	工業化学コース実験室研究室，西大久保キャンパスに移転，大学院に有機合成化学専修新設。
42. 10	村井教授，理工学部長就任。
42. 11 (1967)	11月4日応用化学科創設50周年記念式典を西大久保57号館大教室で，同記念パーティを椿山荘で開催。
43. 9	篠原教授，学科主任就任。
44. 3	山本教授定年退職，名誉教授に。
44. 4	大学院に物理化学専修新設。石川教授 <u>応用化学会会長就任。</u>
45. 9	森田教授，学科主任就任。
45. 10	村井教授，早稲田大学総長就任。
47. 9	城塚教授，学科主任就任。
47. 11	11月18日，応用化学会創立50周年記念式典，同パーティを日本工業倶楽部で開催，50周年記念事業寄付金募集。
48. 2	石川教授逝去 (48. 2. 10)。 棚橋幹一， <u>応用化学会会長就任。</u>

Ⅲ カリキュラム変遷

(1) 昭和5年度

学 科 目	担 当 者 (教員)	毎 週 授 業 時 数			
		第1学年	第2学年	第3学年	
製造化学大意	富青	2			
有機化学	井木	2			
物理化学	栗永	3			
鉱物化学	小徳	0.2, 0			
機械工学	村田	0.2, 1			
熱機関係	師岡	2			
電気理論	帆足	2			
分析化学(講義)	井上	3			
砂糖、澱粉	武鎌	0.2, 2			
光化学	波田	0.0, 2			
護膜	田宅	0.2, 0			
冶金学	三宮	1.1, 1			
基礎工学実験	井上	3			
化学分析	野口	17.9, 10			
製図	山本(忠)	4			
応用物理化学	井張		0.2, 2		
電気化学	松本		2		
電気工学	張		2		
酸アルカリ	堀山		2, 2, 0		
燃料タール工業	内口		0.0, 2		
芳香油	藤小		2, 2, 0		
油脂、塗料	小林		2, 2, 0		
合成化学	栗富		0.2, 2		
石油工業	小武		0.2, 0		
木材乾留工業	西松		0.2, 2		
纖維素化学	清水		2, 2, 0		
醱酵工業	井水		2, 0, 0		
火薬学	栗富		2, 0, 0		
化学測定法	山口		0.0, 2		
製革	小武		17.0, 0		
物理化学実験	山本(研)		0.11, 17		
工業分析	山本				
設計製図	民小		4		
特別講義	野林		0.0, 2		
窯業耐火材料	長屋			0.2, 0	
工業経済	林			2, 2, 0	
試金術	野村			2, 0, 0	
硝子、陶磁器	近藤			0.2, 0	
製造化学実験	小山			31.0, 0	
卒業論文	小古			0.31, 39	
特別講義	林			2, 2, 0	
工場管理法	閑			2, 0, 0	

Ⅱ 大学院専修別教員構成 (昭和49年3月現在)

無機化学専修	{ 教授	大坪	義雄
	教授	加藤	忠蔵
高分子化学 "	{ 教授	篠原	功郎
	教授	関根	吉英
	講師	土神	俊周
燃料化学 "	教授	森田	義郎
応用生物化学 "	{ 教授	鈴木	晴男
	教授	宇佐美	昭次
応用電気化学 "	教授	吉田	忠
化学工学 "	{ 教授	城塚	正彰
	教授	平田	賢孝
	助教授	豊倉	清
	助教授	酒井	
有機合成化学 "	{ 教授	村井	資長
	教授	藤井	修治
有機化学 "	{ 教授	長谷川	肇*
	教授	高宮	信夫*
	教授	佐藤	匡*
	助教授	多田	愈*
物理化学 "	{ 教授	東井	健一*
	教授	宮崎	馨*
	教授	伊藤	智礼*
	教授	高橋	吉彰*

(*は化学科本属)

(3) 昭和48年度

学士号に必要な所定単位表

部 門	一般教育 科 目			外国語科目			専門教育 科 目			保健体育 科 目			合計	学士号
	人 文 社 会	自 然 計	計	第 一 外 語	第 二 外 語	計	必 修	選 択	計	講 義	実 技	計		
機 械 工 学 科	24	24	48	6	8	14	64	16	80	2	2	4	146	工学士
電 気 工 学 科	24	24	48	6	8	14	60	20	80	2	2	4	146	工学士
資 源 工 学 科	24	24	48	6	8	14	37	43	80	2	2	4	146	工学士
建 築 学 科	24	24	48	6	8	14	40	40	80	2	2	4	146	工学士
応 用 化 学 科	24	24	48	6	8	14	41	39	80	2	2	4	146	工学士
金 属 工 学 科	24	24	48	6	8	14	66	14	80	2	2	4	146	工学士
電 子 通 信 学 科	24	24	48	6	8	14	58	22	80	2	2	4	146	工学士
工 業 経 営 学 科	24	24	48	6	8	14	48	32	80	2	2	4	146	工学士
土 木 工 学 科	24	24	48	6	8	14	53	27	80	2	2	4	146	工学士
応 用 物 理 学 科	24	24	48	6	8	14	30	50	80	2	2	4	146	工学士
数 学 科	24	24	48	6	8	14	10	70	80	2	2	4	146	理学士
物 理 学 科	24	24	48	6	8	14	34	46	80	2	2	4	146	理学士
化 学 科	24	24	48	6	8	14	36	44	80	2	2	4	146	理学士

(2) 昭和22年度

	科 目	担当者 (教員)	毎 週 授 業 時 数			
			第1学年	第2学年	第3学年	
必修科目	物理化学	吉田 田	2	2		
	分析化学	宇野 岡	2	0		
	機械工学概論	師 堤	2	2		
	電気工学概論		2	2		
	応用数学	石川 川	2	0		
	無機化学原論	富井 井	2	0		
	有機化学概論	武井 富	2	2		
	化学工業概論	武小 富	2	2		
	コロイド化学	宮部 野	0	3		
	工学基礎実験	宇野 田	9	0		
選択科目	物理化学実験	吉 田	0	8		
	金属材料学	若吉 林	2	0		
	建築学概論	田(郭) 足	2	2		
必修科目	理論物理概論	帆 武	2	2		
	外国語		2	0		
	製 図	松野 野		3	3	
必修科目	工業化学第2, 3, 5部実験	秋山 井		6	0	
	工業化学第6部製造化学実験	富山 口		0	8	
選択科目	工業化学第1部(酸, アルカリ)	石川 川		2	2	
	工業化学第2部(珪酸塩)	宇野 山		2	2	
	工業化学第3部(電気化学)	秋山 井		2	2	
	工業化学第4部(燃料)	富山 村		2	2	
	工業化学第5部(油脂, 塗料)	山本 井		2	2	
	工業化学第6部(糖, 澱粉, 醃酵)	山武 口		2	2	
	工業化学第7部(繊維素)	小 富		2	2	
	光化学			2	0	
	色素及び染料化学	浅岡 岡		2	0	
	ゴム香料化学	苦米 地		2	0	
必修科目	食品化学	武山 富		0	2	
	化学熱力学	山秋 口		0	2	
	化学平衡論	秋 賀		0	2	
	高圧化学	芳		0	2	
必修科目	卒業論文	全教員				
選択科目	触媒化学	石川 川			2	0
選択科目	工業経済	原 田			2	0
選択科目	工場管理	上			2	0
必修科目	卒業論文	全教員				

● 専門選択科目（基礎・演習科目）

学生は、演習科目の内より1単位、基礎専門科目の内より6単位を選択しなければならない。

なお、上記以外に基礎専門科目の内より、さらに2単位以上を選択して修得することが望ましい。

学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数
		第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
		前	後	前	後	前	後	前	後	
演 習 科 目										
無 機 化 学 演 習	大坪			0	2					1
有 機 化 学 演 習 A	長谷川			0	2					1
有 機 化 学 演 習 B	藤井			0	2					1
有 機 化 学 演 習 C	佐藤			0	2					1
物 理 化 学 演 習 A	東, 宮崎			0	2					1
物 理 化 学 演 習 B	吉田, 宇佐美 土田			0	2					1
化 学 工 学 演 習 A	豊倉, 酒井			0	2					1
化 学 工 学 演 習 B	城塚, 平田			0	2					1
基礎専門科目										
構 造 有 機 化 学	鈴木			0	2					2
有 機 反 応 機 構	長谷川, 佐藤			0	2					2
配 位 化 合 物 化 学	高橋			0	2					2
界 面 化 学	吉田, 加藤			0	2					2
量 子 化 学 (I)	宮崎			0	2					2
プ ロ セ ス 工 学 A	酒井			0	2					2
プ ロ セ ス 工 学 B	豊倉			0	2					2
基礎・演習科目合計				0	30					22

応用化学科 専門教育科目学科配当表

● 専門必修科目

学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数
		第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
		前	後	前	後	前	後	前	後	
化 学 工 学 I	城塚	0	2							2
無 機 化 学	大坪	2	2							4
有 機 化 学(I)	藤井	2	0							2
有 機 化 学(II)	藤井, 鈴木	0	2							2
有 機 化 学(III)	鈴木			2	0					2
物 理 化 学(I)	森田, 土田			2	0					2
物 理 化 学(II)	加藤, 宇佐美			2	0					2
物 理 化 学(III)	吉田			0	2					2
化 学 工 学 II	豊倉			2	0					2
化 学 工 学 III	平田			2	0					2
分 析 化 学	加藤			2	0					2
数 学 E				2	2					4
物 理 学 G	井口			2	0					2
化 学 分 析 実 験	大坪, 加藤 宇佐美			4	4					2
工 学 基 礎 実 験	長谷川, 土田			4	4					2
物 理 化 学 実 験	森田, 宮崎 土田					8	0			2
工業化学実験 (I)	篠原, 藤井 鈴木, 長谷川 宮崎					0	8			2
化学工学実験 (I)	城塚, 平田 豊倉, 酒井					0	8			2
卒 業 論 文	全教員									1
専門必修科目合計		4	6	24	12	8	16			41

● 専門選択科目（コース別）

学生は所属するコースの科目の内より8単位を選択して修得しなければならない。

なお、上記以外に全科目の内より、さらに4単位以上を選択して修得することが望ましい。

学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数
		第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
		前	後	前	後	前	後	前	後	
工業化学コース										
無 機 合 成 化 学	加藤					0	2			2
銧 物 化 学	大坪					0	2			2
石 油 化 学	森田					0	2			2
高 分 子 化 学	土田					2	2			4
電 気 化 学	吉田					2	0			2
生 物 化 学 (Ⅰ)	鈴木					2	0			2
生 物 化 学 (Ⅱ)	宇佐美					0	2			2
レ オ ロ ジ ー	篠原					0	2			2
有機反応機構演習	佐藤, 多田					2	2			2
量子化学 (Ⅱ)	宮崎					2	0			2
構 造 化 学	東					2	0			2
化学工学コース										
拡 散 操 作	早川					0	2			2
機 械 的 操 作	豊倉					0	2			2
反 応 工 学 B	城塚					0	2			2
プ ロ セ ス 設 計	和田					0	2			2
モ デ ル 解 析 法	平田					2	0			2
移 動 速 度 論	平田					0	2			2
物性定数推算法	酒井					2	0			2
プ ロ セ ス 制 御	井上					0	2			2
装 置 構 造 設 計	溝口					0	2			2
コース別専門選択科目合計						16	28			42

● 専門必修科目（コース別）

学生は所属するコースの全科目を修得しなければならない。

なお、上記以外に他のコースの講義科目の内より、さらに4単位以上を選択して履修することが望ましい。

学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数
		第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
		前	後	前	後	前	後	前	後	
工業化学コース										
無 機 工 業 化 学	大坪, 吉田 加藤					2	0			2
有 機 工 業 化 学	篠原, 森田 鈴木					4	0			4
工業化学実験 (Ⅱ)	吉田, 篠原 藤井, 鈴木 長谷川, 佐藤							8	0	2
化学工学コース										
反 応 工 学 A	城塚					2	0			2
単 位 操 作 A	豊倉, 酒井					2	0			2
単 位 操 作 B	平田					2	0			2
化学工学実験 (Ⅱ)	城塚, 平田 豊倉, 酒井							8	0	2
コース別専門必修科目合計						12	0	16	0	16

● 専門選択科目（各コース共通）

学生は下記科目の内より6単位以上を選択して修得することが望ましい。

学 科 目 名	担 当 者	毎 週 授 業 時 数								単 位 数
		第1年度		第2年度		第3年度		第4年度		
		前	後	前	後	前	後	前	後	
工 業 材 料	吉田, 加藤 長谷川					2	2			4
機 器 分 析 法 A	加藤, 宮崎 井上, 大塚					2	0			2
機 器 分 析 法 B	長谷川					0	2			2
光 反 応 化 学	長谷川							2	0	2
放 射 化 学	藤井							2	0	2
触 媒 化 学	森田							2	0	2
高 分 子 化 学 工 業	篠原							2	0	2
生 物 化 学 工 業	宇佐美							2	0	2
化 学 工 業 論	村井							2	0	2
電 子 計 算 法	武田							2	0	2
自 動 制 御 B	依田							2	0	2
計 測 工 学	大照, 町山							2	0	2
原 子 力 工 学	藤本							2	0	2
管 理 工 学	中井							2	0	2
品 質 管 理	池沢							2	0	2
熱 管 理	塩沢							2	0	2
シ ス テ ム 工 学	城塚							2	0	2
粉 体 工 学	酒井							2	0	2
プ ロ セ ス 開 発	妹尾							2	0	2
環 境 化 学	森田, 城塚 宇佐美							2	0	2
各コース共通専門選択科目合計						4	4	34	0	42

編集にあたりて

早稲田応用化学学会創立五十周年記念事業の一つとして本書の出版が決定、その編集委員長を委嘱され、関係諸氏のご支援をえてここに刊行することができた。

本書の刊行にあたっては、まず当会運営委員会に本書編集委員会の委員の推薦を願い、学外卒業生および教室のなから次の諸氏が委嘱された。

学外——棚橋幹一 若山一彦 鎮目達雄 中曽根莊三 柳沢亘 名手孝之

教室——大坪義雄 篠原功 森田義郎 鈴木晴男 佐藤匡 宇佐美昭次 豊倉賢

昭和四十八年二月二十二日、第一回編集委員会を開催、次のように編集刊行の大綱を決めた。

一 過去の記録を整理、出来るだけ正確に残すことに留意し、会員諸氏に呼びかけ資料寄稿の提出を求める。

二 内容は応用化学科創立五十周年記念式典における山本研一氏の講演（応化会だより第五号掲載）を参考とし、小林時代（創立～昭和十一年頃）、戦中・戦後（昭和十二年～二十六年頃）、新制大学充実期（昭和二十六年～三十八年頃）、および最近の十年、の四期に分け、各期について座談会を開催しテープに集録する。

三 学内資料、寄書、座談会記録についての編集は本委員会が行ない、原稿の作成および印刷はダイヤモンド社に依頼する。

昭和四十八年八月下旬、座談会を市ヶ谷私学会館などにおいて四回開催、参加者延べ約五十名、十余時間におよぶテープを集録、これに会員諸氏からの寄稿約五〇点、および学内関係資料約五〇点を加え計一五〇点を編集資料として、同年九月末ダイヤモンド社に原稿作成を依頼、翌四十九年一月脱稿、直ちに編集委員および教員各位に草稿の査読を願い加筆訂正、集録写真の選定を経て、一月末編集委員会を開催、原稿完了の承認をへて印刷に入った。

冒頭に述べたように、本書は昭和四十七年にむかえた応用化学会創立五十周年を記念して企画されたものであるが、応用化学科の創設は大正六年（一九一七年）であり両者は経過年数六年の差をみている。また内容においても応用化学科との両面から展望をこころみており、これらの事情を考慮して編集委員会において本誌の名称を「早稲田大学応用化学半世紀の回顧」とした。

何分にも長年月にわたる内容であり、また紙面予算の都合で必ずしも意を尽くせぬところがあるかと思われる。会員諸氏のご指摘があれば次回刊行において集録されることを希望する。

本書の発刊は編集委員はもとより会員関係諸氏の貴重な寄稿助言、座談会出席諸氏のご尽力に負うものである。教室の佐藤匡、宇佐美昭次両氏には約一カ年にわたる企画、資料の収集編集、卒業生柳沢亘、名手孝之両氏には数回にわたる座談会の司会、ダイヤモンド社には編集原稿作成の労をわずらわした。衷心より感謝をいたすとともに、本書の刊行に当たり会員諸氏および各方面よりの多大のご援助ご指導に対しても、深甚なる謝辞を表するものである。

昭和四十九年二月

応用化学科五十年史編集委員会委員長

大坪義雄

早稲田大学 応用化学半世紀の回顧（非売品）

発行日 昭和四十九年四月一日

編集 応用化学科五十年史編集委員会

発行 早稲田応用化学会

東京都新宿区西大久保四一七〇
早稲田大学理工学部応用化学科内

制作 ダイヤモンド社

大久保キャンパス内のハイテク・リサーチ・センター棟に「森村記念ラウンジ」が設置される。

森村市左衛門は1839年に江戸京橋に生まれた。20才の頃の森村は武家を相手に、横浜の開港後は、舶来品を仕入れては土佐、中津、加賀藩などを相手に商った。

その後、森村は、弟豊を渡米させ、日本の陶器を中心に貿易の仕事をさせたが、その限界を知り、日本で陶磁器を創って売ろうと、大倉孫兵衛等とともに名古屋に専属窯を開設し、明治37年に日本陶器合名会社を設立した。この日本陶器の本業からは、東陶機器、伊那製陶等の窯業会社を生み出した。そして、日本最初の貿易会社森村商事を設立し、ノリタケのブランドで米国で成功を収めた。

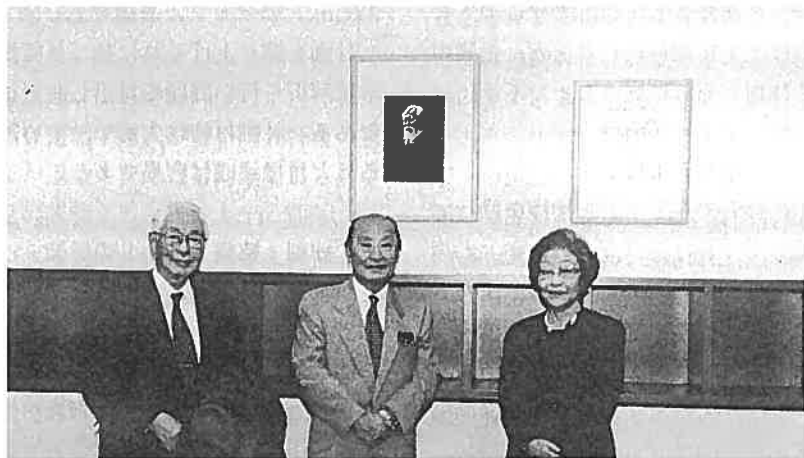
森村はまた、森村組の経営の安定をはかるため森村銀行を明治30年に設立した。早稲田大学は、明治41年の理工科開設時には、戸山の土地購入に際してこれを担保にこの銀行から融資を受けた。

理工科の開設に当たっては、森村は波澤栄一とともに大学の基金管理委員となり、率先してともに2万円の寄附をした。また、大正5年に理工科拡充のため応用化学科が開設された際には、主宰する森村豊明会より5万6千円の寄附があり、これをもとに延べ303坪の応用化学実験室が建った。この建物は、大正12年の関東大震災で焼失したが、再び豊明会より3万円の寄附があり再建された。ちなみに、豊明会とは、明治33年6月に長男明を、7月に弟豊を亡くした森村が二人の名前を冠し、教育・社会事業に奉仕するために設立したものである。

大隈重信は創立35周年式典の際、森村に深甚な謝意を表している。「ここに忘る可からざる人は波澤男爵の友人で、この学校に応用化学の実験室を拵へて下さった所の森村男爵である。これは私より一つ弟、私は一つ兄だ。これが又人格の優れた人である。」と大隈は演説している。大正8年1月、大隈は森村を終身維持員とし、また校賓として遇した。

早稲田大学は、豊明会からの寄附によって建設された西早稲田キャンパス6号館の壁に、「豊明会記念応用化学実験室」のプレートを埋めこみ、その由来を残しているが、平成9年12月大久保キャンパスに竣工をみたハイテク・リサーチ・センター棟に森村市左衛門氏の名を冠した「森村記念ラウンジ」を設け、氏の肖像を掲げて、森村市左衛門氏の名を永く語り継ぐとともに、氏の功績をあらためて記念することとした。

昨年末、文部省の補助金を得て完成したハイテクリサーチセンター62号館B棟内1階に標記の記念室が設けられた。故森村市左衛門氏は同室の顕彰文にあるように応用化学科の恩人である。12月9日、ご遺族をお招きしてご案内した。



記念室内の故森村翁の写真、顕彰文を背に、中央：当主 森村 衛氏（森村産業株式会社社長）両脇：森村学園学園長 松本重一郎氏ご夫妻（奥様は森村 衛氏のご令妹）